

魔法少女リリカルなのは ~黒衣の魔導剣士~ Another

夜神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付けば『夜月翔』は不思議な空間に存在していた。そこで出会ったアリシア・テスター・ロツサと共に彼は並行世界へと渡る。自分にとって大切な人達に少しでも幸せな時間を過ごさせるために。

※黒衣の魔導剣士の方にリメイク前のような話も読みたいという強い想いの感想を頂き、なら前に書いていたものをそれに合わせて作り直そうと思つて書いてみました。リメイク前に近い形で書きたいと思いますので、無印やA_S編はともかく空白期を長めに書いていきたいと思います。かつてのようにネタや読んでみたい話があればぜひ教えてほしいです。またこの作品は『暁』の方でも掲載しています。

目 次

プロローグ

1

第1話 「異なる世界」

17

第2話 「これから居場所」

25

第3話 「朝からひと悶着」

35

第4話 「知らないけれど知つてゐる」

41

第5話 「想いはそれぞれ」

50

第6話 「今後の始まり」

59

第7話 「異なる流れ」

69

第8話 「懐かしき重み」

79

第9話 「接触・忠告」

88

第10話 「特訓と微々たる変化」

100

プロローグ

何か……頭の中に浮かんでくる。

崩壊の中。プレシアはそつとアリシアの入ったカプセルに寄り添う。彼女の視線は、アリシアではなくテスタロッサの方へと向いている。

『私は行くわ……アリシアと一緒に』

それはあくまで俺の主観になるが、拒絶の言葉ではなくて別れの言葉のように感じた。

『母さん……』

『言つたでしょ……私はあなたが大嫌いだつて』

大嫌いだと言いながらも、プレシアの声色はこれまでのものと違つて優しいものであり、顔も見方によつては微笑んでいるようにも見えた。それと同時に、ふと嫌な予感がした。

次の瞬間、プレシアとアリシアのいる付近が崩壊し始め、テスタロッサはふたりの名前を呼びながら駆け寄ろうとする。しかし、それは落下してきた巨大な岩石によつて阻まれた。

『……いつもそうね……私は気づくのが遅すぎる』

テスタロッサよりも先に動き出していたこともあって、俺はプレシアの腕を掴むことができていた。彼女は走馬灯でも見ているのか、独り言を呟いている。

『気づけたのなら……変わればいい』

『——っ!? ……あなた……何をしているの?』

『聞かなくても……分かるはずだ』

重い……プレシアの身体には全く力が入つていない。

アリシアと共に死ぬつもりでいるから……という理由だけじゃないだろう。ロストロギアを用いた不確定なやり方や先ほどの吐血からしてプレシアは病を患つている可能性が高い。身体に力が入らない状態でも不思議ではない。

『……放しなさい。このままだとあなたも死ぬわよ……』

『死ぬつもりはない。だからあなたも生きろ』

『……ふふ、勝手に助けようとしているくせに身勝手なことを言うわね。……いまさら生きてどうなるというの？　もう遅いのよ』

『遅くなんてない！』

声を荒げてしまつたからか、床が少し崩れた。

もうあまり時間が残されていない。さつさとプレシアを引き上げて脱出しなければ、俺もあの世行きだ。そうなつてはファラを道連れにしてしまうだけでなく、叔母やあの子を悲しませることになる。

『あの子はあんたのことを母親だつて思つてる。それにあんただつて気づいたんだろ！　だつたらやり直せるはずだ！』

『……やり直す時間なんて私には残されていないわ』

『だとしても……あの子と話せる時間があるのなら、できる限り話すべきだ！　……親と話すことは、子供にとつて必要なことなんだから』

俺は今にも泣きそうな顔を浮かべているのか、プレシアの目が大きく見開かれている。彼女は一度俯いた後、再びこちらに顔を向けた。それは母親の笑みと呼べそうな顔だつた。

『あの子のこと……お願ひね』

プレシアは最後の力を振り絞つて俺の手を払つた。声にもならない声を上げて手を伸ばしたが、彼女の手を握り直すことはできない。

落ちていくプレシアに自分の母さんの影が重なり、悲しみや寂しさ、喪失感が一気に湧き上がる。

『アリシア！　母さん！』

落ちていくプレシアやアリシアに手を伸ばすテスタロッサをアルフが止める。

テスタロッサがふたりの名前を呼ばなかつたなら、俺が「母さん！」と叫んでいたかもしれない。そんなことを考えているうちに、ふたりの姿は見えなくなつてしまつた。テスタロッサの目からは涙が溢れています。

――何で……何でもつとしつかりと握つていなかつたんだ！

自分がしつかりと握っていたならば、プレシアだけでも助けられたかもしない。助けられなかつたとしても、テスタロッサに会話させてやれたはずだ。親を失う悲しみを知っているのに……俺は……。

『あんたも何じつとしてるんだい！ 脱出しないとくたばるよ！』

アルフに腕を引かれた俺は、思考の渦から抜け出せない状態だったが脱出を開始した。脱出する中、俺の口の中は血の味がしていた。

これは……そうだ。

プレシアを……フェイトの母親を助けることができなかつたときの記憶。

『リインフォース！ リインフォース、みんな！』

はやては押し殺していた感情を爆発させるように声を上げた。この声にリインフォース達も気が付いたようで、全員の視線がこちらに向いている。

『はやて！』

『動くな！ 動かないでくれ。儀式が止まる』

こちらに駆けようとしたヴィータをリインフォースが制した。動いてしまうと儀式が止まってしまうのだろう。

俺は車椅子を押し続け、リインフォースの前で止めた。それと同時にやはやは再び口を開く。

『あかん！ やめてリインフォース、やめて！』

『…………』

『破壊なんてせんでもええ。わたしがちゃんと抑える！ 大丈夫や。やからこなんんせんでもええ！』

『……主はやて、よいのですよ』

『良いことない！ 良いことなんて……何もあらへん』

はやての目に涙が浮かんだ。それを見てもリインフォースは穏やかな笑みを浮かべたまま、彼女を見ている。

一瞬リインフォースと視線が重なつた。はやてを連れてきたことで何か言われるかと思つたが、俺に対しても穏やかな顔を向けるだけ

だつた。彼女は視線をはやてに戻すと話し始める。

『ずいぶんと長い時を生きてきましたが、最後の最後であなたに綺麗な名前と心を頂きました。ほんのわずかな時間でしたが、あなたと共に空を駆け、あなたの力になることができました』

『う…………』

『騎士達もあなたの傍に残すことができました。心残りはありません』

『心残りとかそんなん……』

『ですから、私は笑つて逝けます』

リインフォースの表情は穏やかなものだが、そこには強い決意を感じる。彼女ははやてに何を言われようとも、儀式をやめるつもりはないようだ。

『あかん！ わたしがきつと何とかする。暴走なんかさせへんて約束したやんか！』

『その約束はもう立派に守つていただきました』

『リインフォース！』

『主の危険を払い、主の身を守るのが魔導の器の務め。あなたを守るために、最も優れたやり方を選ばせてください』

『……そやけど』

弱々しい声と共に涙が溢れた。

その姿を見た俺の胸の内に、自分がやつたことは正しかったのかという疑問が湧き上がってくる。自分が正しいと思ったことが、他人にも正しいことだとは限らない。俺が行つたことは、はやてを苦しめているだけなのではないか。

『ずっと悲しい思いしてきて……やつと！ ……やつと救われたんじゃないか』

『私の魂は、あなたの魔導と騎士達の意思の中に残ります。私はいつもあなたの傍にいます』

『そんなんちやう、そんなんちやうやろ！』

『駄々つ子はご友人に嫌われます。あなたの大切な彼も困っていますよ』

ゆつくりとはやてが俺の方を振り返る。

涙を流している彼女の顔に思わず顔を背けたくなつたが、ぐつと堪えて視線を重ねた。俺は自分で思つてはいる以上にひどい顔をしているのか、はやはては何も言わない。溢れる涙で何も言えないのかもしないが。

『ですから聞きわけを我が主』

『……リンフォース！』

一度俯いた後、はやはてはリンフォースの元へ向かい始めた。しかし、雪で隠れていた石に車輪がぶつかり横転してしまう。

反射的に駆け寄りそうになるが、リンフォースに視線を向けられ足を止める。

——はやての思いは分かる……俺もリンフォースを救いたい。だけどリンフォースの思いも理解できるし、はやてのことを考えるならば彼女の意思を尊重することが正しいのだろう。

『なんでや……これからやつと始まるのに。これからずつと……幸せにしてあげなあかんのに』

倒れた状態のまま泣くはやてを見て、リンフォースは魔法陣のぎりぎりまで歩み寄り片膝を着く。俯いていたはやてもそれに気づき視線を上げた。

『大丈夫です。私はすでに世界で一番幸福な魔導書ですから』

『リン……フォース』

リンフォースは優しげな笑みを浮かべるとはやての顔に付いていた雪を払い、彼女の頬に優しく手を添える。

『我が主、ひとつお願ひが……私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよろしければ、私の名はその欠片ではなく、いずれあなたが手にするであろう新たな魔導の器に与えてもらえますか？』

はやはては返事を返せずにいたが、リンフォースは彼女から手を放すとさらに続ける。

『祝福の風リンフォース。私の願いは、きっとその子に継がれます』

『……リンフォース』

『はい、我が主』

はやては一際大きな涙を流し始め、リンフォースは立ち上がりた。魔法陣の中央に戻るかと思ったのだが、視線を俺のほうへと向けてきたため彼女へと歩み寄る。

『君は主のため、騎士達のために色々と頑張ってくれたのにひどい真似をしてすまなかつた』

『……謝るのは俺のほうだ。助けるつて言つたのに……何もできずに見送るしかないんだから』

口から出た声は震えていた。はやてのよう胸の内が感情で溢れつつあるのか涙も出そうになる。

リンフォースは優しい笑みを浮かべながら、俺を落ち着かせるかのように頬に触れてきた。その状態のまま話し始める。

『そう自分を責めないでくれ。君やあの子達は、私の悲しみの連鎖を断ち切つてくれた。それだけで充分に助けられているよ』

『だけど……』

『ふふ、意外と君も聞き分けがないのだな』

そういうところ我が家主に似ている、と続けるリンフォースの顔は幸せそうに見える。

今迎えようとしている結末は、彼女が本当に望んでいることなのだろう。高町達も1歩たりとも動こうとはしていない。儀式はもう止まらないと分かる。ならば俺がすべきことは笑つて彼女を見送ることなのかもしない。

『俺は……はやてよりも駄々っ子じゃないさ』

『ふふ、そのようだ。……終焉の時も近い。最後に君にもお願ひがあるのだが』

『構わないよ』

『では……これから先もどうか主——いや、主だけじゃない。主がいつか手にするであろう魔導の器も騎士達と共に見守つてほしい』

『……ああ、約束するよ』

震えそうになる声を押さえ込み、どうにか力強く返事をすることができた。リンフォースは礼を言うかのように微笑むと魔法陣の中央へと戻る。

穏やかな笑みを浮かべるリインフォースの身体が青色に発光し始めたかと思うと、彼女の身体は徐々に青い光と共に空へと消えて行った。

誰もが無言で空を見詰めていると、何かに気が付いたはやてが身体を引きずりながらリインフォースが立っていた場所まで進んだ。彼女が身体を起こして座りこんですぐに空から発光する物体が降りてくる。

はやての手の平に落ちたそれは、金色の十字架のようなアクセサリーだった。リインフォースが言っていた欠片なのだろう。

『う……う……』

欠片を大事そうに胸に当てながら再びはやはては泣き始める。何を言えればいいのか分からぬ状態だったが、俺は彼女へと近づいて片膝を着いた。

潤んだ瞳がこちらに向けられたかと思つた次の瞬間には、俺の胸ではやはては出来る限り声を殺して泣いていた。高町達も静かに駆け寄つてくるが、誰もはやはてに声をかけない。俺と同じように何を言つていいものか分からぬのだろう。

何も言えないのなら抱き締めてやるだけでも、と思つて手をはやはての背中に回したがやめた。今の俺にそんな資格があるとは思えなかつたからだ。

——どうして……こんな結末にしかならないのだろう。本当にこんな結末しか迎えられなかつたのだろうか。

俺は静かに視線を上げて、リインフォースが消えて行つた空を見た。そこにあるのは舞い散る雪だけであり、何か答えがあるわけではない。そう分かつていても見上げずにはいられなかつた。

……リインフォース。

俺は今日の出来事を絶対に忘れない。

お前との約束を果たすために強くなるよ。もう今日のような結末を迎えないために。お前の大切な主や騎士達を守れるように……。

これも覚えている。

初代リインフォース……はやての大切な人を救うことができなかつた日の出来事だ。

『何で……何でいつも守れないんだ。……父さん達の時も……プレシアの時も……リインフォースの時も。……今は……あのときちゃんとあいつの気持ちを考えていたなら止められたはずなんだ。どうしていつも俺は……』

忘れるはずもない……なのはが墜ちてすぐの頃、俺がはやてに漏らした言葉。

一度弱音を吐き出すとなかなか止めることができなくて。だけどあいつは何も言わずはずと優しく抱きしめてくれた。

これらの記憶と想いは今の俺を作るうえで欠かすことができない出来事。そう断言できる。

だが……どうして今こんなことを思い出しているのだろうか。

今脳裏に過ぎつた日のことを忘れたことはない。忘れられるはずがない。

でも俺は押し潰されることなく、前を向いて……未来に向かつて進んでいたはずだ。

……どうしてこんなにも胸が苦しいのだろう。

もちろん笑つたりできない記憶だということは分かつている。

けれど、悲しみや苦しみを味わつてもあいつらは強く気高く前を向いて……笑いながら毎日を過ごしていた。楽しそうに過ごしていた。なのに……どうして俺はこんなにも苦しんでいるんだ。最も苦しい想いをしたのはあいつらのはずなのに。

「それはね……あなたが心の底では常に助けたかった、救いたかったって思つてたからだよ」

どこか聞き覚えのある声が耳に届いた直後、暗い海の底に沈んできょうな不快な感覚が消える。まぶたを上げてみると、何とも表現し

がたいが温かな光に満ちた世界が飛び込んできた。周囲を見渡すとひとつ小さな影が見える。

「……フェイト？」

いや……明るく長い金髪や顔立ちはよく似ているが、俺の知る最も古いフェイトよりも目の前にいる少女は幼く見える。

ただ彼女とは以前にもどこかで会っているような気がする。

それもごく最近……そうだ。先ほど蘇ってきた記憶の中にほんのわずかばかりだがこの子の姿があつた。彼女は……

「……アリシア？」

「うん、そうだよ」

アリシアはにこりと微笑む。

フェイトのオリジナルとは知っているが、こうして見ると見た目は似ていても別人だと感じた。

何故ならこの子の笑みは、明るく活発な印象を受ける。対してフェイトは穏やかで優しげな笑みを浮かべていた。プレシアがふたりが同一の存在ではないと思ったのも頷ける。

「ふふ、そう思えるのはあなたがフェイトのことをきちんと見ていたからだろうけどね」

「……君は人の心が読めるのか？」

「あはは、わたしにはそんな力はないよ。魔導師としての才能もありなかつたしね。あなたの考えが分かるのは、ここはそういう特殊な空間だからだよ」

あなたにもわたしの心の声聞こえるでしょ？

と、アリシアは口を開いていないのに俺の中に声が届いた。信じがたい現象ではあるが、こうして現実に起きてしまっている以上、信じないわけにはいかない。

そもそも、俺は『魔法』という存在を知っているし、『ロストロギア』といった時として奇跡的な力を秘めた存在も知っている。心が通じ合うくらいの現象でパニックを起こしたりしない。

「思考が読める理由は分かつた……ついでにいくつか質問したいんだが」

「どうぞどうぞ」

「まず最初に……どうして俺はこんな場所に居るんだ？」

少し記憶が曖昧になつてゐるが、俺ははやてに誘われて機動六課に出頭し……それでヴィヴィオに出会つて、最終的にはジエイル・スカリエッティが起こした事件を解決。それで機動六課が解散された……そのあとは技術者の仕事をベースに生活を送つていたはずだ。

ロストロギアに関わる仕事はしていなかつたのに、どうして今居るような不思議な空間にいるのだろうか。ここに来る直前のことも分からないので見当がつかない。

「それはね……うーん、ちょっと説明しにくいんだけど……神様って存在信じる？」

「神様？……基本信じてはいないが、いないとも言い切れないな。無数の次元世界が存在している以上、神様みたいな存在がいる世界もあるかもしれない」

俺の言葉にアリシアは、肯定的な返事をありがとうといったニュアンスの言葉を口にし、続きを話し始める。

「ここはね、神様が作り出してる空間なんだ。だからあなたのなかでは死んでいるはずのわたしが存在しているし、言葉を発しなくても会話することが出来る。あなたがここに居るのは、神様に呼ばれたというか選ばれたからかな」

にわかには信じがたいことではあるが、目の前には俺の記憶ではすでに死んでいるはずのアリシアの姿がある。

それにこの空間は魔法で作られているようには見えない。魔法とは別の力が働いているような気がする。

またアリシアが嘘を言つているようにも見えないため、心から納得はできなくても割り切ることはできる。ただ……

「……どうして俺が選ばれたんだ？」

俺はそれほど特別な人間ではない。

魔導師としての才能は身近な人間に比べれば平凡なものだつたし、身体能力や知能的な面も天才と呼ばれるものでもなかつた。

自分なりに努力して周囲から認められる強さや技術は身に付けは

したが、それでも俺よりも優れた人間は数多く居るだろう。俺の生きた時間軸だけが対象になつているように思えない。にも関わらず、何故俺が選ばれたのだろうか……。

「それはね、あなたの中にわたしのお母さんやリインフォース……アインスを助けたい。なのはに辛い想いをしてほしくないって強い想いがあつたからだよ。……あなたはパラレルワールドつて分かるかな？」

唐突に何を言つているのだろうか……まあ今は氣にせずに話を進めるしかないとだらうけど。

「まあ何となく……俺の世界を基準にすれば、君が生きていた世界みたいなことだろ？」

「そうそう。えっとね……信じられないかもしだれないので、あなたが過ごした世界。ジュエルシードや闇の書を巡る事件が起きる世界は無数に存在しているの」

確かに……聞いてすぐに「はいそうですか」と鵜呑みにできる話ではない。が、心が通じ合う状態のせいいかアリシアが嘘を吐こうとしていない気持ちは理解できる。

正直……伝わつてくる感覺からしてどうやらアリシアも俺と同様にここに呼ばれた存在のようだ。なので完全には状況を理解していないらしい。まあ単純に年齢が問題してるかもしれないが。

「あ、今わたしのこと子供だつてバカにしたでしょ。そりやあわたしはこんな見た目だけど、あなたより色々と知つてるんだからね。そういうこと考えると教えてあげない」

といつても、ある程度のことは伝わつてくるのだが……今伝わつてくるのは子供染みた悪口ばかりなので、このままでは話を進めることはできない。ここは素直に謝るべきだろ。

「悪かつたよ。それで……神様は俺に何をさせようつて言うんだ？ できれば元の世界に帰りたいんだが」

「ああーそれは無理だね。ここにいるあなたは、あなたの世界に居たあなたと同一の記憶を持つてはいるけど別の存在だから」

あなたあなたと少し分かりにくかつたが、つまりは

「……一種のクローンってことか？」

「うーん……わたしやフェイトみたいな関係とは違うけど、まあそんな感じかな。いきなりこんな場所に連れて来られたのにこんなことを言うのもなんだけど、あなたには帰る場所はないよ」

可愛い顔でさらりと残酷な現実を告げてくれるものだ。

帰る場所がないのだとすれば、俺はいつたいどこで何をすればいい。ここでずっとこの少女の相手をして過ごすことになるのだろうか。

「あはは、まあそれもひとつ選択肢はあるね。けど、一応あなたにはここに留まる以外にも選択肢はあるんだよ」

「選択肢？」

「そう。それはね……無数に存在している並行世界のひとつ。あなたが存在してなくて、わたしが死んでて、なのはが魔法に出会つて、ジユエルシードや闇の書を巡る事件が起きる。正史とでも呼べる無数の世界の基準となっている世界にわたしと一緒に行くつて選択肢とかね」

正史ということは、それが本来というか基準となっている世界ということか。

確かにアリシアの今言つた流れと、俺が体験してきた流れは大筋似ている。流れに大きな差がないのは、俺の能力が存在していようと存在していなくとも変わらない微々たるものだつたからか。そのように考えると納得できる……が、納得できない部分もある。

「行つてどうするんだ？　あの頃のなのは達よりは強いだろうし、起ころ出来事が大きく変わらないのなら先回りして変えることが出来るかも知れない。だがそれは……」

人生は言動を選択することで成り立つていて。常にルート分岐があるようなものだ。些細な違いであれば大本の筋書き通りに進むだろ。だが小さな変化でも積もれば別のルートに移る可能性はある。

そうなれば先回りすることはできなくなるし、それが元で従来よりも重い未来が訪れることになるかもしれない。

「うん……確かにそうだね。あなたが思ったようなことになる可能性

はある。あなたは魔導師として1人前の力量を持つてゐるし、向かう世界の時間軸によつては未來の技術の知識も有してゐるから。わたくよりも大きな変化をやろうと思えば起こせると思うし」

「なら……俺は」

「ううん……行かない方がいいなんてことはないんだよ。だつてどうなるかなんて分からないし、良い方向に変わることだつてあるんだから」

アリシアは迷子に向けるような優しい笑みを浮かべる。生きた時間は俺の方が長いのだろうが、それでも彼女が先に生まれたのだと理解させられるような大人っぽさがあつた。

「それに……全てを変える必要なんてないし、大きく変える必要もない。本来別れないといけない人とほんの少しでも長く一緒に居られること。将来を左右しかねない怪我を少しでも軽くすること。それだけでも……あの子達にとつてはプラスになるんじゃないかな。だから……」

アリシアが小さな両手を前に出すと、そこに光の奔流が生じ一点に向かつて集まり始める。まるで魂のような根源的な存在を思わせる光は、集束されていくに連れて黒曜石のような漆黒色の十字架へと変わる。

「わたしと……この子、『レイディアントノワール』と一緒に行こう。ほんの少しだけかもしけないけど、流れを変えて……あの子達にとつての幸せな時間を増やせるかもしねりない」

流れを変える。

それはプレシアやアインスを救うことができるかもしねりない、といふことか。

アリシアは基準となる世界ではジュエルシードや闇の書を巡る事件が起きると言つた。つまり、プレシアの死や初代リインフォースとの別れは必然的に起ころ出来事ということになる。なのはのあ一件もそれに含まれてゐるのがもしねりない。

あの出来事は全て関わる人間に悲しみや寂しさ、痛みのを残した。そうならないようにした方が良いのかもしねりない。でもそれが

あつたからこそ、ここに来る直前までの……俺の知る彼女達が居たのではないか。世界の流れを変えてしまえば、彼女達の存在そのものを変えることになるのでは？

だが……それでもやる価値はあるように思える。

何故なら行く時間軸にもよるが、おそらく全てを変えることは不可能に近い。だけど

もしも……あのとき俺がプレシアを助けられていたのなら。

もしも……アインスが空へと還らなければならぬと事前に知っていたのなら。

もしも……なのはを特別扱いせず、抱えていたものに目を向けていたなら。

アリシアの言うように少しだけでもあいつらにとつて幸せな時間を増やせるのかもしれない。

それによって俺の知るあいつらとは別の道を歩むことになる可能性はある。だが……大切なのは

「うん……そうだよ。これから行くことになる世界からすれば、わたしやあなたは異物。見知った人間は存在していても、わたし達のことを知っている人間はいない。どんなに姿・形は似っていても、そこにいる人達はあなたの知っている人達とは別人。過去を変えれば未来が変わるようになれるが流れを変えればその後どうなるか誰にも予想できなくなる。あなたの知っている彼女達じゃなくなるかもしない」
でもね……

「あなたの知っているように世界が進むとも限らないし、もしも……の可能性に溢れてる。それでも……その世界のあの子達が自分で満足できる答えになつたのなら、違つた道に進んでいいとわたしは思うんだ。人にとっての幸せはひとつじゃないんだから」
「そうだな……」

「答えは決まってる気がするけど、あえて聞くよ……あなたはどうする？」

そんなの決まっている。

アリシアの言うように俺の知っている彼女達ではないだろう。根っこは同じであつても、俺という存在がない世界に行く以上、俺のことを知る者はいない。ならば俺の知る彼女達とは異なつている点があつて当然だ。

でも俺はその世界で何が起きるかを知つていて。

全てを変えるなんて言えないけども、少しでも幸せな時間を過ごしてほしいという想いがある。

それはもしかすると彼女達の人生を歪めてしまうことになるかもしない。しかし、俺の知るものに似た流れで世界が進むのだとしたら……悲しい出来事が多すぎる。

それを少しでも無くし、俺にとつて大切な人々をわずかにでも笑顔にすることができるのならば、やってみる価値はある。

「俺は……もしもほんの少しでも流れを変えることができるのなら……悲しみを減らすことができるのなら——」

行く世界の人間からすれば余計なことかもしれないし、俺の自分勝手なことなのかもしれない。けど……

「——少しでも幸せな未来が切り開けるのなら、たとえ嫌われることになろうと挑戦してみたい」

「そつか。じゃあ、一緒に頑張ろう。たとえこれから行く世界でどんなに苦しいことや辛いことがあっても、わたしはあなたの味方でいるから」

そう言つてアリシアは黒に輝く十字架を俺に渡し、それにも負けない輝かしい笑みを浮かべる。

やつぱり……アリシアとフェイエイトは別人だ。同じような外見をしていても、本質の部分は異なつている。例えるなら太陽と月のようなものだ。同じ光を放つ存在でも照らし方が異なる。

「話もまとまつたことだし、さつそく出発しよう!」

「ああ……どうやつて出発するんだ?」

「そ・れ・は……」

アリシアが指を鳴らすと、突然浮遊感に襲われる。

視線を落とすと、そこには真っ暗な穴が存在しており、留まることを許さない力が働いている。そのため俺の体が必然的に落下し始めた。

「テンプレでおりというやつですよ♪」

「そんなの知るか!？」

「どうか、先に一言言つておけ！」

そのように言う暇はなく、俺はアリシアと共に暗い奈落の底に落ちて行つた。終始彼女の顔が笑顔だつたのは言うまでもない。

第1話 「異なる世界」

延々と続いた闇の世界を抜け光のある世界に出たかと思うと、体の前面にそれなりの痛みが走った。どうやら地面に激突したようだ。

とはいえ、これ以上の痛みを経験したことはある。

涙を流すような真似はしない。このような手段を取つたアリシアには文句があるが……。

「——つ!?

上体を起こした矢先、何か硬いものが頭に激突した。予想していかつた事態に俺は後頭部を押さえ込みながらその場に蹲る。

「いつつ……あなたつて思つた以上に石頭だね」

近くから聞こえたその声によつて状況を理解する。十中八九、俺の上にアリシアが落下してきたのだろう。

石頭つて……アリシアのほうが石頭だろ。ああくそ……涙出てきた。

何かに頭をぶつけて涙を流すなんていつ以来だろうか。少なくとも小学生に上がつてからは記憶にない。もしかすると人生初かもしけない。

「あのな……普通は先に謝るだろ」

後頭部を擦りながら起き上がる。

目の前にはでこあたりを擦つているアリシア、周囲は森の中なのではないかと思うほど自然に溢れていた。

いつたいどこに出たんだ?

見知らない世界に来たんじやないだろうか……、と思つた直後、かすかに見覚えのあるある建物が見える。

俺の記憶が正しければ、海鳴市でも標高の高い場所にある神社のはず。あそこならば街とは違つて自然も多かつたので、周囲が森のようのも納得がいく。

……それにしても。

何やら妙に違和感がある。まず目の前に見えるアリシアだが、こんなにも大きかつただろうか。先ほどまでは頭ふたつ分ほど小さかつ

たように思えるのだが、今はひとつ分あるかどうか……。

もしかして巨大化したのか……いや待て、俺の手はこんなに小さかつたか？ それに地面との距離が近くなっているような……。

「まさか……！」

体のあちこちを見たり触つたりしながら自分の体について確認する。

正直に言つて信じたくはないが……どうやら俺の体は縮んでしまつたらしい。

おいおい……嘘だろ。体が縮むだなんてどこのアニメだよ……俺は変身魔法なんて使つた覚えはないし、現在も使つていない。着ていた服まで子供サイズのものに変わつていて、いつたい何が起こつたんだ？

「どうかしたの？」

「どうもこうも……体が縮んでたら困惑するだろ」

「ああーそのこと」

アリシアは大した問題ではないと言わんばかりの表情を浮かべ、さらりと話し始める。

「何で体が小さくなつたかっていうとね、この世界のあの子達と同じ年になるように力が働いたからだよ。さつきのままだと関わりづらいでしょ？」

確かにそのとおりではあるが……事前に伝えておいてもよかつたんじゃないのか。そうすれば困惑せずに済んだがな。

現在地までの落下やその後の衝突、今の件で苛立ちを覚えた俺は、そのことを言葉にしながらアリシアの両頬を引っ張る。彼女はすぐさま謝りながらやめてほしいと言つてきたが、すぐにやめては今後舐められる恐れがあるし、また反省しないかもしれない。そのため5秒ほどは継続した。

「うう……ひどいよ。もうわたしお嫁に行けない」

「これくらいで行けなくなるわけないだろ」

まったく、フエイトと違つて茶目っ氣のある奴だな。

とはいって、まあアリシアのおかげで体についての疑問は解消した。

大人から一気に小学生……具体的に言えば、小学3年生くらいの背丈になつたせいで違和感は拭えないが。

まあそれでも人間には適応能力があるし、一度は経験したことがある感覺だ。時期に慣れるだろう。

……問題はこれからだな。

俺の背丈やこの世界に送り込まれることになつた経緯から考えて、今の時期はジュエルシード事件が始まる前だろう。

数年後に起こる出来事を考へると、あの子を魔法に関わらせないという選択肢もあるが、それではジュエルシードや闇の書を巡る事件が俺の知る流れとは大きく異なることになる。

そうなると介入は難しくなるし、フェイトの交流関係に支障が出る可能性も大きい。

フェイトがジュエルシード事件を乗り越え、笑えるようになつたのはなのはの存在が大きい。どれくらい流れを変えられるか分からない以上、下手に流れを変えるのは危険か……。

「難しい顔してるね。もしかしてまだ痛いの？ 痛いの痛いの飛んでいけ！」 つてしてあげようか？」

「いい。君からされても惨めになるだけだ」「む……そういう言い方しなくてもいいじやん。そつちだつて子供なんだから」

「君よりは大人だ」

「そんなの見た目と実際に生きた時間だけだよ。わたしのほうが早く生まれてるもん！」

生まれてるもんつて……こういうところにムキになつてる時点でも年上のようには思えないんだが。見た目も俺よりも小さいし、アリシアのほうが大人だと思うのは無理があるだろう。

「そんなことよりこれからどうするんだ？」

この世界からすれば、俺やアリシアは本来存在しなかつた異物。

俺の体を小さくしたように不思議な力が働いている可能性はあるが、戸籍があつても住居がないといつた可能性は充分に在り得る。正直……住む場所とかなかつたらかなり困るぞ。ここは地球みた

いだし、平日の昼間に子供が出歩いていたらおかしい。

アリシアあたりは見た目が外国人だから旅行で来ているなどと思われるかもしれない。が、黒髪黒目の俺は完全にアウトだろう。両親のことを考えるとハーフなのだが……アリシアと一緒に居ても兄妹に思われるかは怪しい。

そもそも……ジュエルシード事件のことを考えると、アリシアの姿をあの子達に見られたりするのは不味いだろう。

ここに居るアリシアは、この世界のプレシアが蘇らせようとしているアリシアではない。見た目や記憶は同じでも異なる存在だ。

アリシアがプレシアに会えば……事件にならずに終わる可能性もあるかもしねれない。

だが、この時期のプレシアは精神を病んでいる節もある。下手をすればこの世界のフェイトの扱いが悪化しかねない。この時代の過ごし方は今後のフェイトに大きく影響するところだ。迂闊な真似はできない。たとえ今このとき辛い想いをしているとしても……。

「そんなこと……結構重要だと思うけど、まあいいや。わたしのほうがお姉さんなんだし、ムキになっちゃダメだよね」

「何をブツブツ言つてるんだ？ 行く宛てとかなかつたらかなり困ると思うんだが？」

「ノープロブレム！ そのへんはきちんと用意されているのですよ。神様も送り込んで終わり、みたいな冷たいことはしないんだから」

俺があの空間で出会つたのはアリシアだけだ。神様がどうのと言われても反応のしようがない。

まあ、今の口ぶりと流れを変えれるかどうかは俺達自身ということからして、神様が手伝つてくれるのは俺達がこの世界で過ごすための準備だけなんだろうな。

そんなことを考えながらアリシアの後を付いて行つて街へと繰り出す。

景色を見た限り、俺の知る町並みと大した差はない。故にここに自分を知る人間がいないう現実が辛くもある。

自分から望んだこととはいえ、ここには両親はおろか義母さんもい

ない。それはつまりファラ達も存在していないということだ。

今の俺は、俺という存在が居た世界の俺のコピーのようなもの。

俺の記憶の中に入る人々は悲しんでいたりはしていないだろうし、騒がしくも楽しい日々を今も過ごしている気がする。

俺は……いったい何なんだろうな。

この問いに答えを出せるのは俺と……目の前にいる少女だけだろう。

しかし、彼女との関わりは現状ではないに等しい。そもそも、俺が俺のコピーといった発言をしたのは彼女だ。彼女の内で俺という存在はそれなのだろう。

「えーと……ここを右？ それともひとつ先なのかな？」

考えてしまつても仕方がないと思い視線を前に戻すと、何やらアリシアが地図と睨めっこしていた。彼女の表情からして上手く地図を読めないらしい。

まあ無理もないか。

アリシアは地球で過ごしたことなんてないわけだし、俺の知る世界では5歳頃に亡くなっていた。見知らない土地の地図を上手く読めというのは難しい注文だろう。

「ちょっと見せて」

「え……わあッ！」

アリシアの肩付近から覗き込んだ直後、彼女は慌てた様子で俺から距離を取る。何やら顔が異常なまでに真っ赤になっているが、いったいどうしたのだろうか。

「い、いきなり近づかないでよ。びっくりするじやん！」

「ああ……悪かったよ。けど過剰に反応しすぎじゃないか？」

「…………」

「なぜ黙る？」

「……あんまり男の子に慣れてないの！」

アリシアの心からの叫びは、俺だけでなく周囲にも聞こえたようで、複数の視線がこちらに向けられた。ただ会話の流れは聞こえなかつたようで、周囲の人々はケンカでもしているのか？ といった顔

をしている。

感覚の違いから不便に思つてたけど、今だけは背が縮んでて良かつた。

前のままだつたら、完全に小さな子供をいじめてる構図に見えただろうし。もしくは娘に駄々をこねられる父親か……まあ気にしないでおこう。

「慣れてないつて……普通に話してたじゃないか」

「話すのは大丈夫だけど、心の準備が出来てないときに近づかれるのはダメなの。大人の男の人は大丈夫だけど」

「ふーん……」

見た目に反してずいぶんとマセてるんだな。

というか、今更だけどこのアリシアはどの世界から来たアリシアなんだろうか。

基準となる流れではジュエルシードを巡る事件が起きるらしいから、大抵のアリシアは命を落としているはず。

このようなことを考えるはどうかとも思うが、5歳ほどで亡くなっているのならば異性を意識したりはしないだろう。

なら……この子はあの空間でずっと過ごしていたのだろうか。

もしそうなら俺よりも年上だという話にも一応納得ができるし、異性を意識しているのも理解できる。

「ふーん……つて、その反応はひどくないかな」

「俺がもしこの体くらいの年代だつたら、多分まともに会話とかしてなかつたと思うけど

「……それでよくあなたの世界のあの子達と仲良く出来てたね」

「あの子達のおかげだよ」

あまり心を開こうとしない俺に何度も話しかけてくれて、心の強さつていうものを教えてくれたんだから。あの子達が居たから俺は少なからず変わることが出来たんだと思う。

俺の知る彼女達にはもう恩返しをすることはできないけど、まあその役目はあの世界の俺がするはずだ。

俺がすべきことは、少しでもこの世界の彼女達を幸せに……笑顔に

すること。そのために今は目の前のことをひとつひとつ片付けていくしかない。

「それより地図を見せてくれ。見た限り俺の知る街並みと大差ないようだから」

「そうやってコロコロと話題切り替えると女の子にモテないよ」「あいにくモテたいと思つたことはない」

「ふーん……それって身近に女の子が居たからかもね」

そう言いながらアリシアは地図を渡してくれたが、こちらを見る目が少し冷たいように思えた。

確かに身近に異性は居たが、それとこれとは話が別ではないだろうか。……まあ男子から可愛い幼馴染が居てずるい！ といった発言をされたことはあるが。

ちなみに幼馴染というのは、はやてのことだ。付き合いが1番長いのでそのように思われていたらしい。

可愛いつて……まあ可愛いと思つたことはあるが、あいつの相手をするのは結構きついんだけどな。ある程度親しくならないと面倒臭いところを見せないから知らない男子は多いだろうけど。

……これ以上考えるのはやめよう。俺の知るあいつはここにはいないんだから。

「……ん？」

「分かつた？ それとも分かんないのかな？」

「確実に当たつてるとは言えないな。だから地図は返すから君は独りで行くといい」

にやけ面がイラッときたので、俺はアリシアに地図を返して歩き始める。

するとアリシアは慌てて後を追いかけてきた。本当に置いて行く勢いがあつただけに、ほんの少しだが泣きそうになつてている。そうなつてはこちらが謝るしかない。このへんが女子の厄介などころだ。「悪かつたよ。だから泣かないでくれ」

「別に泣いてないもん」

「そうか。じゃあ行くぞ、ちゃんと付いて来いよ」

「また子ども扱いする……」

「俺も君もここでは子供だろ。少なくとも見た目は」

第2話 「これから居場所」

住所を見たときから何となく分かつていたのだが、地図どおりに進んだ先にあつたのは俺のよく知つた家だつた。玄関の近くの標識には『夜月』と書いてある。

分かりやすいようにしてくれたのか、それとも一種の嫌がらせなんか……まあ深く考へても仕方がない。そう思つて、玄関を開けよう手を伸ばす。

——ちょっと待てよ。

本当にここで合つてゐるのだろうか。夜月なんて苗字がそろそろあるとは思えないが、可能性はゼロではない。もしかすると場所を間違つている可能性も……。

「……アリシア」

「なに？」

「もう1回地図を見せてくれ。念のためここで合つてるか確認しておきたい」

またからかつてくるか、とも思つたが、アリシアは素直に地図を渡してきた。

もしかすると、先ほど置いて行かれそうになつたので懲りたのかもしれない。一時的なものかもしれないが。

「……うん、ここで合つてるな」

「そつか。じゃあ、さつそく入ろう。なかなか立派なお家だよね」

立派と言われて悪い気はしない……が、ここは俺の知る家に外觀がそつくりというだけであつて、中身まで同じとは限らない。そもそも、ここには俺の家族がないのだから中身が同じであるはずはないだろう。

「……あれ？」

「どうした？」

「鍵が掛かってる。ねえ、鍵持つてる？」

「持つてるわけないだろ」

俺は突然あの空間に呼び出されて、身ひとつでここに来たんだから

……つて、玄関周りに鍵がないか探すんじゃない。活発なのは一般的に良いことだけど、そういう活発さは今すぐ捨てろ。

というか、スカートを履いているのに無防備になるなよ。この街の治安は良いけど、世の中には小さな女の子が好きだつて連中もいるんだから。

「あれ？ あなた方は……」

耳に届いた第三者の声に振り返つてみると、薄茶色の髪を短めに切り揃えている女性が買い物袋を片手に立つていた。

アリシアは今しがたまで取つていた行動に罪悪感を感じ、彼女に怒られるとでも思つたのか俺の背中に隠れる。隠れるくらいならば最初からするなど言つた。

「もしかして……ショウさんとアリシアさんですか？」

「え、はいそうですけど」

俺はこの女性に前の世界で会つたことはない。

ただ……俺やアリシアの名前を知つていてことから判断すると、神が用意した協力者だろうか。ここに行くように指示されていたことを考えると、その可能性が大だろうが……。

「それはすみませんでした。今日来るのは聞いていたのですがタイムセールがあつたもので……すぐに開けますね」

女性は一度笑顔を浮かべると駆け足で玄関に近づいて鍵を開ける。先に入つてもらつたほうが入りやすかつたのだが、俺達が子供といふことで気を遣つてくれたのか、彼女は扉を開けたまま中に入るよう促してくれた。好意を無駄にするのも悪いので、俺はアリシアと一緒に中に入る。

……装飾は違うけど、やつぱり俺の知る間取りと同じだな。
と、しみじみとした感想を抱いた直後、女性に奥に進むように指示される。

指示通りに進むと、リビングへと到着。置いてある家具が俺の知るものより可愛いものになつてゐるせいか、凄まじい違和感があつた。
「ソファーに座つて待つてください。すぐにお茶を出しますから」
思わずお気遣いなくと言つたが、女性はそれよりも早く

キツチンへと向かつてしまつた。追いかけてまで言うのもあれなので、言われたとおりソファーに腰掛けて待つことにする。

アリシアは女性が優しそうな人だと分かつて安心したのか、俺の隣に座ると室内を見渡している。大したものは置いてないよう見え
るが、魔法世界出身の彼女には珍しいかもしれない。

……分かつてはいたけど、やっぱり別の世界なんだな。

両親やはやて、義母さん達の写真が飾つてあつた場所には何も置か
れていない。

自分の存在していない世界に行くという話を聞いていたはずだが、
やはり俺にとつてあの人達との思い出は大きなものだつたようで、喪
失感や孤独感が混じつた感情が芽生える。

そのとき――。

不意に小さな手が俺の手を握つた。

室内にいる人物や距離感からしてこのような真似ができるのはひ
とりしかいない。

意識を向けてみると、予想通りアリシアが俺の手を握つていた。彼
女の顔を見る限り、どうやら心配されるほど暗い顔をしていたらし
い。

「大丈夫?」

「ああ……少し思つただけだよ。本当に別の世界に来たんだなって」

「そつか」

アリシアは簡潔な返事しかしなかつた。けれど彼女はとても優し
げに笑つて、俺を励ますように、慰めるように頭で撫でてくる。

恥ずかしさもあつたが、アリシアの顔や手から伝わつてくる温もり
は心地良いものだつた。

胸の中にあつた負の感情も少なからず和らいだ気がする。それと
……ほんの少しだけお姉さんっぽいと思つた。

「お待たせしまし……」

テーブルにお茶を並べていたリニスさんの顔は固まる。直後――

「ど、どうされたんですか。もしかして頭でもぶつけましたか!?」

「ああいや、大丈夫です。この子がお姉さんぶりたいだけなので」

「ちよつ、それはひどくない。暗い顔してたから……！」

「その話はあとで聞いてやるから」

アリシアの頭を軽く叩いて黙らせ、女性に話を進めてほしいと目で訴える。こちらの意思を理解してくれた彼女は、向かい側のソファーに座りながら口を開いた。

「そうですね……今後のこと話を前にまずは私の紹介から。はじめまして、私はリニスと言います」

「あ……お姉さん、わたしが飼つてた山猫と一緒に名前なんだ」

「ふふ、同じ名前というか同じ存在なんんですけどね」

リニスという女性は、アリシアを見ながらにこりと笑う。しかし、アリシアは今の言葉の意味が理解できていないので首を傾げている。無論、ふたりの過去に詳しくない俺も理解できとはいえない。

「本来……基準通りの流れで進んでいる世界では、私は人間でなく使い魔として存在はしています。いや、この時期にはすでにいなくなっているので存在していたというほうが正しいでしょうね」

「ということは、お姉さんは元々わたしが飼つてた山猫だつたってこと？」

「はい。もう少し詳しく説明しますと、私という存在を生み出したのはプレシア。アリシアさんが亡くなつた後、フェイトが生まれた頃に使い魔になりました。与えられた役割はフェイトの魔導師としての教育とお世話でしたね」

ということは、リニスという存在はフェイトの魔法の師匠ということか。

プレシアは大魔導師としての力量を持つていただけに、彼女の資質を受け継いだ彼女も相当な力量があつたと考えられる。

ジュエルシード事件の頃からフェイトが高い力量を持つていたのも頷ける。同時にド素人から彼女と同じ力量にまで成長したなのがこれまでより余計に異常に思えるが。

「へえ、あのリニスがこんな綺麗なお姉さんになつてフェイトに魔法をね。……ということは、わたしよりも魔法の才能あるんだ」

「落ち込むなよ。世の中には魔法が使えない人間だつているし、才能

で全てが決まるわけじゃないんだから」

「それはある程度魔法を使えるから言えるんだよ」

アリシアは拗ねたように唇を尖らせる。

確かに俺は、全ての分野においてある程度までのレベルなら使うことができる。魔導師としての才能としては器用貧乏と思われるだろうが、鍛え上げれば万能へと変わる資質だ。実際に機動六課に配属されたころにはそう呼べる力量は身に付いていたし。

それだけにアリシアからすれば充分な才能なのかもしれない。なのでこれ以上話すのは彼女の機嫌を損ねる危険性があるのでやめておこう。

「リニスっていう存在の経緯は分かつたけど、リニスさんはどうしてこの世界に？」

「それはあなたの方のサポートをするためですね。昼間出歩ける人間がいないと困ることもあるでしょう」

まあ休日でもないのに小学生が歩いてたら学校をサボったのかと思われるし、保護者的な存在が居たほうがいいのも確かだ。

ただ……実際の年齢は分からないが、リニスさんの見た目は18歳ぐらいに見える。

義務教育は終わっている年代なので私服ならば出歩いても問題ないと思うが……保護者としては問題があるのでないだろうか。「えつと……ちなみに俺達の関係はどういう感じになつてるんですか？」外には夜月って書いてありましたけど

「それはですね、夜月という名前はショウさんだけになつてます。私はリニス・ナイトルナ……ショウさんの親戚ということになつていますので」

ナイトルナ……まさかここでそれが出てくるとは。

まあ血の繋がりがないよりは良いが、神様は俺の記憶を参考に必要なものだけを用意したような気がする。馴染みがあるのでありがたく思えるが、ある意味では迷惑だ。

「わたしは？ テスタロツサのままいいの？」

「良いと思いますよ。アリシアさんは別の世界から来た存在ですか

ら、次元漂流者と考えれば問題はないでしょうし。今の時期に目立つと不味いことになるかも、ではなく間違いなく不味いことになる。

不味いことになるかも、ではなく間違いなく不味いことになる。

おそらくこの世界のアリシアは、今もプレシアの元に居るのだ。世の中に自分と同じ顔は3人ほど居るとは言われているが、ここまで同一の存在はいないだろう。シユテルやレヴィ、ディアーチェなどのは達のそつくりさんに会つたことはあるが完璧な同一人物ではないのだから。

話が少しそれてしまつたが、アリシアがなのは側・フェイト側のどちらに見つかってもややこしいことになる。そうなれば知っている流れから変わる可能性も出てくるだろう。

そうなれば先回りした行動も出来なくなり、未来が俺の知るものより残酷なものへと変化してしまうこともあるだろう。極力そうなるリスクは避けるべきだ。そうなつた場合は……そうなつてで対応するしかないだろうが。

「そうですね……アリシアはしばらく家からあまり出ないほうが多い気がします」

「うう……つまんない。でも仕方ないかな……わたしが目立つと流れが変わっちゃいそうだし。……ん、リニスさんも意外とわたしと同じ立場なんじや？」

「そうなりますね。プレシア側に見つかると面倒なことになりそうですし、私もしばらくはアリシアさんと同じ立場ですね」

自分と似た境遇がいることが嬉しかったのか、アリシアの顔に笑顔が弾ける。それを見たりニスさんの顔にも笑みが浮かぶ。

アリシアが人を明るくできる笑顔の持ち主であり、その子の母親だつたからこそ、プレシアはあのような状態になつてしまつたのかもしない。

「……なあリニスさん、時の庭園の場所は分かつたりしないか？ それさえ分かれば、取れる行動の幅も出てくるんだが」

「すみません、残念ですが今の私には分かりません。私は私という存在がどのような存在だつたか、ということは知らされています。その

頃の多少の記憶はあるんですが……流れを変える役目の大半はショウさんが担っていますので」

ということは、現状で時の庭園に向かうことはできないということか。

いや、そもそもここは俺の知る世界に酷似していても別の世界だ。乗り込んだ時の場所に時の庭園があるとは限らないし、ジュエルシードを巡る事件が同じ日に起こるかどうかも分からぬ。

「となると……流れを変えるためには、まずジュエルシードを巡る事件に関わるところからか。……ん？　今流れを変える役目は俺が担つてるって言つたけどアリシアは？」

「気持ちとしてはやりたくもあるけど、わたしには魔導師としての才能というか力量があまりないからね。戦闘をこなせる自信もないしそんなあなたが鍛えてくれるなら別だけど。確か教導官の資格持つてたよね？」

確かに持つてはいたし、実際に教えたこともあるが……メインだったのは星の隊長さんだつたけど。

ただ……アリシアを鍛える必要があるのだろうか。少なくともジュエルシード事件が終わるまで。長ければ闇の書を巡る時間が終わるまで彼女は表舞台には立てない。なら必要ないのではないか

……

しかし、多少なりとも魔力を持つてゐるが故に標的にされるケースもある。俺が知つてゐるとおりに進むならあの騎士達は魔力を集めて回るのだから。

もしそうなつた場合、自衛の手段や魔力操作を覚えていないと危険な目に遭うかもしれない。なら最低限のことは教えておくべきか

……

「あのさ……そこまで難しく考えられると何か複雑なんだけど。資質に恵まれてないから教えるとなると大変んだろうけどさ」

「ふふ、多分そうじゃないですよ。ショウさんはアリシアさんに危険な目に遭つてほしくないんだと思ひます。だから戦闘するような場所には行かせたくないし、それなら教える必要もない。だけもしも

の場合のことを考えると……とか考へてゐるんですよ」

いや、まあ……そうなんですけど。

でもその分かつてますよ感のある笑顔を向けるのやめてもらつていいですか。地味に恥ずかしいので。

「それは……そうちと女の子として嬉しくはあるけど、ひとりだけ危ない目に首を突つ込むのは心配だよ。待つてることだけしかできないわけだし」

「だそうですよ。ショウさん」

「はあ……分かった、分かりました。無理がない程度には教えます」

「言い方は何かあれだけど、ありがと！」

おいら、お前は異性には慣れてないんじゃなかつたのか。何でここで抱き着いてくるんだよ。

別に興奮とかはしないが、フェイトに顔立ちが似てゐるから恥ずかしさはあるんだぞ。身体が子供の頃に戻つてゐるから身長差もあまりないし。必然的に顔とか近くなるだけで……。

精神は基本的に大人だが、もしかして身体に引っ張られているところもあるのだろうか。

もしそうなら……まあ変に大人の思考で判断していくもののは達と関わる時に困ることがあるかも知れない。そういう意味ではありますがないことだが。

「あのさ……こういうことは苦手じやなかつたのか？」

「自分からするのは平氣なのですよ」

あーそうですか。何かそんなこと言つてましたね。

やれやれ……この手のことは慣れているとはいえ、ないならないに越したことはない。これからひとつ屋根の下で生活を共にすることを考えると、やはり思うところが出てくる。

あいつらと違つて下手に反撃すると別の意味で面倒なことになりそうだし。

「そりいえば……リースさんは魔法とかはどうなの？」

「私ですか？ 私は元の存在とは多少変わつてはいますけど、それなりの力量はあると思いますよ。さすがにショウさんには及びません

が。ただアリシアさんには負けないと 思いますし、ショウさんに鍛えてもらえばそこそこ強くなると思います」

「む……そういう言い方は大人としてどうなのかな」

まあはたから見れば大人が子供には負けないと言つて いるようなもの。故にアリシアの気持ちを理解できる。

だが……別にそこまで張り合うことでもないと思うのだが。今後主に動くのは俺なのだし、アリシアとリニスは敵対する間柄でもないのだから。

「子供扱いして いないだけですよ。外では周囲の目を気にしてそのよう に振る舞うことはあると思 いますけどね」

「そう言われると……まあいいかな」

いいのかよ……なら最初から噛みつくなよな。

「やれやれ……」

「む、その反応は何なの?」

「別に」

「別につて……何かあるからそういう反応したんでしょ。多分だけどわたしのことバカにしたよね!」

別にバカにはして いないのだが。見た目よりは大人ではあるけど、やつぱり子供っぽさは残つてるんだなと思つただけで。

「まあまあアリシアさん。ショウさんはそういう方なんですよ。仲良 くしたいのは分かりますけど、これからは一緒に生活するんですから 焦る必要はないと思 います」

「な、何でそういう話になるの!?」

「うん、それは俺も思つた。

ただ……リニスさんが素で言つて いるのか、からかつて言つて いるのかはよく分からん。接した時間が短いのも理由だが、俺の知る桃子さん達みたいに露骨にからかつて ますよ感が感じられない。

「あ……そ ういえば、おふたりのお洋服とか買わないといけませんね。ショウさんはもうすぐ学校に通うことになりますし、その準備も……」

「話逸らされた!？」

「重要なのはそこじゃないだろ」

「いやいや、わたしにとつては結構重要だよ！」

「リニスさん、学校つていうのは？」

「こつちも無視!？」

別に無視はしてない。あえてスルーしただけだ。あとで相手してやるから今は黙つてなさい。

「もちろん、ショウさんの通う学校ですよ。目的を果たす上でその方が都合が良いでしようし」

「いや、まあそうですけど……」

「場所は言うまでもなく聖祥大学附属小学校で3年生スタートです。タイミングにもよりますが、授業参観とかには行きますね」

確かにのんは達と関わる上で合理的な手段だと思うよ。

でもさ……中学を卒業した頃ならまだしも、社会人として働いていた奴が再び小学3年生からやり直すことになるのは複雑な気分になつて当然だと思う。今は耐えるしかない。そう分かつてはいても

……

「あ、リニスさんだけずるい。そのときはわたしも行く！」

「いや……君ら当分大人しくしかないとダメだろ」

「むー……そうだけど」

「でも機会があれば行つていいですよね。私はショウさんの保護者みたいなものですから」

「えーああうん……時期が来ればね」

第3話 「朝からひと悶着」

自分の知る世界に酷似した世界に来てから数日が経過した。

アリシアとリニスとの暮らしにはまだ慣れてはいないが、昔から義母さんと一緒に暮らしていたし、一時期はシユテルやデイアーチエとも生活を送っていた。男女比で言えば今と変わらないので、日に日に慣れつつはある。

ただ……アリシアもリニスさんもあのふたりとは大違いだからな。アリシアは一言で言えば、実に明るく活発な少女だ。表情もころころと変わるし、身振り手振りも実際にバラエティに富んでいる。

ただ予想される流れでは、近々ジユエルシードを巡る事件が起ることもあるって、アリシアは外出を控えている。そのため、有り余った元気をどうにか発散させようと何かと俺やリニスさんに絡んでくるのだ。

「お姉さんだつて自分で言うならもう少し落ち着いてほしいもんだ」リニスさんは、よくアリシアの行動に何でも嬉しそうに付き合えるよな。

まあリニスさんからすれば、アリシアだけでなく俺も見た目的には年下なので可愛く見える存在なのかもしねないが。

ただ……ここ数日間どうにも落ち着かない。リニスさんは真面目で優しくて、家事も万能にこなせる……普通に考えれば凄く頼りになる存在だ。だがどうにも彼女が何かしてくれているところを見ると、地味にそわそわしてしまう。

……あれか、手間の掛かる年上と一緒に暮らしていたから違和感を感じてしまっているのか。

今の外見は小学3年生ほどだが、中身は大人。中学の間はディアーチエに家事全般を任せていた時期もあるが、トータルで考えれば自分でやつっていた時間の方が長い。

それだけに……人に任せて何もしないのが落ち着かないのかもしれない。

とはいえ、リニスさんは私がやりますからって基本的に断つてくる

し。これが自分の仕事だからっていうか、家事をやつていて幸せそういうから強く言えないんだよな。

「……慣れるまで時間が掛かりそうだ」

でも学校に行つてる間とかは何もできないし、休日とか手伝えるときは一声掛けみてよう。

やつぱりリニスさんだけに家事をやらせるのはあれだし、家事をやつてたほうがこちらの気分も落ち着くだろうから。見られて困るようなものはないけど、自分の部屋くらいは自分でしたいし。

そんなことを思つている間に、日課であるランニングが終了する。ただいまと言ひながら中に入ると、リビングのほうから良い匂いが漂ってきた。どうやらリニスさんはすでに起きていて朝食を作つてくれているらしい。

「……やつぱり落ち着かないな」

ありがたいことだとは思うし、社会人になつてからもディアーチエが度々してくれていたことではあるが……俺の中では自分がするこの枠に入つてしまつていて。

と言つても……するなとは言えないし、料理が不味いわけでもない。感謝はすれど文句は言えないよな。それは人として間違つているし。

そう思いながら自分の部屋に戻つて着替えを手に取る。そのあと素早く汗を流した俺は、髪の毛を拭きながらリビングへ向かつた。中に入ると、テーブルに朝食を並べていたリニスさんと目が合う。

「あ、おはようございます。その年で毎日欠かさずランニングなんて感心です」

「おはようリニスさん……あのさ、今ではこうだけど俺は少し前まで大人だつたんだけど

「それでもですよ」

そう言つてリニスさんは笑う。

まあどうこう言つたところで、今ここに居る俺は見た目は小学生なのだ。年下に扱われても仕方がないと言えば、仕方がない。それ故にこだわつても意味はないだろう。

それに……褒められているので悪い気分でもない。この話題はここまでにしておこう。

「つて……ショウさん、ダメじゃないですか」

何が？ と思つた次の瞬間には、リニスさんが俺の目の前に立つていた。

何やら少し怒つているように見える。そう思つているとリニスさんは俺の首に掛けていたタオルを取り、半乾きだつた俺の髪を拭き始めた。

「ちゃんと拭かないと風邪を引いてしまいますよ」

「えつと……自分で拭けるんだけど」

「そう言う子に限つて拭かないんです。顔も何だか赤くなつてますし」

リニスさん、だから俺は見た目は小学生でも中身は大人なんだつて。

誰かに頭拭かれたりするのは普通に恥ずかしいから。それにリニスさんは美人なんだからさ、俺も意識してしまつうわけで。大人の男とまでは言わないけど、最低限異性としては扱つてほしいんだけど。「体調悪かつたりしませんか？」

「それは大丈夫です……そろそろ離れてもらつていいですか？」

「ふふ、ずいぶんとマセた小学生さんですね」

「からかわないでください。俺の中身が小学生じやないつて知つてるでしょ」

と本心を伝えたものの、リニスさんは笑顔のままだ。

理解してくれていいのかいないのか……今後はきちんと髪を拭くようにしよう。また今日のような目に遭つては精神的にきついものがある。アリシアに見られて彼女までするなんて言い出したら……心に来るものがあるし。

「ショウさん、もう少しで準備終わりますからアリシアさんを起こしてきてもらつていいですか？」

「それは……別にいいですけど」

見た目はあんなどし、精神は見た目よりは大人だけど……子供の異

性には慣れてないって言つてたからな。俺が起こしに行くと何か起きそうな気もする。

なのでリニスさんに行つてもらいたいところだが、彼女の優しい目を見ていると俺に行かせる気満々に思えてならない。

まあ今後一つ屋根の下で過ごす間柄であることを考えると、こういうことに慣れておくことも必要か。さすがに着替えるときとかに入るつもりはないし、ノックもきちんとするけど。

そう割り切つたのだが、血の繋がりもない異性の部屋に入るというのに抵抗はあるもので、アリシアの部屋に向かう俺の足取りは重めだ。すでに起きているか、ノックで起きてくれることを切実に願う。

「アリシア、起きてるか？」

ノックしてから話しかけてみたが返事はない。なので一度目より強めにノックをし、やや大きめの声で彼女の名前を呼ぶ。だが返事はない。

……ああもう、どんだけ寝ぼすけなんだよ。

内心で舌打ちしながら再度ノックし、反応がないことを確認してから扉を開ける。

ほんの数日前まで飾り氣のない部屋だったのだが、今では実に女子らしい部屋になつている。そこのベッドでアリシアは布団を抱きしめながら幸せそうな顔で眠つていた。

「もう……ショウは意外と甘えん坊さんだね」

何の夢を見ているのが分からぬが、今の発言と寝顔からして實にアリシアには楽しいものなのだろう。俺からすると楽しくなさそうな可能性が大だが。

とはいへ、ここで胸の中に芽生えた苛立ちはぶつけてしまうのは大人気ない。

相手は見た目よりは大人だがやはり子供であり眠つている。また夢くらいは誰だつて自由なものを見ていいはずなのだから。

さて……どうしたものか。

話しかけて起きない以上、肩を揺するといった手段を取るのが無難だろう。

しかし、触るとアリシアに怒られる可能性も……勝手に部屋に入っている時点で文句は言われるか。ならば心地よい感触がしそうな頬を突いてみるのも悪くない。

と思いもしたが、ここは普通に揺ることにした。頬を突いて起こうしたりすれば、あとでからかわれるのが目に見えていい。

「おいアリシア」

「んう……」

何度か瞬きをしたもの、アリシアはまたまぶたを下ろしてしまった。

寝直したのかと思つた矢先……体の向きを変えながらのそりと起き上がり、手で目元をこすり始めた。

「うう……あれショウ……どうしたの？」

「朝食が出来るから呼びに来たんだ」

「そつか……ありが——とツ!？」

急に目を見開いたアリシアは後ろに倒れるように下がり壁に頭をぶつけた。聞こえた音と両手で押さえている姿を見る限りかなり痛そうだ。

しかし、ここで泣かないのが自称お姉さんのアリシアの良いところである。彼女は目元に涙を浮かべているものの、こちらに視線を戻して話しかけてきた。

「な……なんでショウがここに居るの?」

「それは今言つただろ」

「そうじやなくて! 異性の部屋に無断で入るとか何考へてるのつて言つてるの!」

「うわあ……予想してとおりの展開だ。こんな風になりそうちだから来たくなかつたのに。」

「文句なら起こしに行くように言つたりニスさんに言え」

「ぐぐ……リニスのバカ。でもショウもショウだよ、勝手に入らなくていいいじゃん」

「勝手について……何度も返事がないから入つたんだろうが。人を常識がないみたいに言うな。というか、お姉ちゃんぶりたいなら自

分ひとりで起きろ」

「そ……そこまで言わなくてもいいじゃん」

拗ねてしまつたのか唇を尖らせるアリシアの姿は、どう見ても自分がより年上のようには見えない。今後もしあまり大きくならなかつたならば、きっと彼女は年下からも年下扱いされるのだろう。

そうなつた場合は同情するが、今考えても仕方がないことでもある。

アリシアという存在は一般的な流れでは死んでしまつてゐるだけに、彼女がどのように成長していくのか知つてゐる者はいない。

また俺は自分の知る流れと少しでも変えるためにこの世界に来た。持つてゐる力は鍛え上げてきた魔導師としての力と積み上げた技術者としての能力のみ。神のような奇跡を起こせるものではないのだが、未来が変化させるには十分な可能性があるだろう。今はただの目の前のことに意識を向けておくのが無難のはずだ。

そう思つた俺は、ふてくされるように座つてゐるアリシアに声を掛けながら室外へと向かう。

「先に行つてるからさつさと来いよ」

「言われなくともすぐに行くよ、だ！」

「べー……つて、子供だな。まあアリシアは子供か」

「子ども扱いしないで。そつちだつて子供のくせに！」

第4話 「知らないけれど知っている」

かつて毎日使った通い慣れた道を使って登校しているが、やはり違和感がある。

人に言つても信じてはもらえないだろうが、俺はごく最近まで社会人だったのだ。だが今は小学3年生である。体も縮んでしまつており、実に小学生の制服が似合つていて。

世間で言うところの春休みが明けて新学期がスタートしたわけだが、再び小学3年生を経験しているのはきつと俺だけのはずだ。

一度経験した学年をやり直すというのは何とも言い難い気分である。まあ懐かしさもあつたりもするのだが。

だけど……昔からではあるが、同級生のテンションには付いていけない。子供はどうしてあんなにも元気に活発に行動できるものなのだろうか。全ての生徒がそうではないのだが。

あれこれ考えながらこれから1年間通うことになつている教室に入り、クラスメイトと簡潔に挨拶を交わしながら自分の席に座る。
「……早く学校終わらないかな」

「あんた、来て早々何言つてんのよ」

近くから声がしたので意識を向けてみると、そこには金髪の少女が呆れた顔を浮かべて立っていた。

この少女の名前はアリサ・バニングス。俺の記憶にある小学生のときの彼女と何ひとつ変わらない容姿をしている。

ただこの世界のアリサは俺の知る彼女よりも社交的なのか、それとも前と違つて俺が話しかけやすくなつてているのか、このように自分から話しかけてくる。

まあ意外と嫉妬深いというか、素直じゃないけどやきもちを焼く奴だからな。前の世界ではすずかと繫がりがあつたからツンケンしてたところもあつたけど、この世界のすずかとは繫がりがない。そのへんも親しくしてくれている理由なのかもしれない。

「そういう日もあるだろ」

「まあ……ないとは言えないけど。あたしの知る限り、あんたは毎日

のようと思えるんだけど？」

「ん、それは毎日俺を見ているってこと?」

「なつ……ち、違うわよ！ 隣の席なんだから視界に入るだけで。勘違いしないでよね！」

大丈夫、それは分かってるから。

何の因果か……会ったことはないが存在しているという神様のせいかもしれないが、俺は見事になのは達と同じクラスになつていて。席はアリサの隣ではあるが、3人のうち誰かに関われば必然的に残りの2人とも関わるようなものだ。

例えばすずかなんて、俺が工学系の本を読んでるだけで興味を持つてくれた。

だが内気な性格故か……自分から話しかけてきたりもすれば、話しかけてこなかつたりするわけで。構つてほしいというか、話したいような視線を向けてくるのでこちらから話しかける羽目になつたりする。まあ今は時期的に距離感を図りかねているだけかもしれないが。「してないから安心していいよ」

「……そこまで淡々と言われるとあれね、何だか玩具にされてるような気分になつてくるわ」

「まさか。確かに君の反応は面白くはあるけど、別に玩具にしているつもりは……」

「面白いって思つてることとは、わざとやつてるつてことでしようが！」

そう言つてアリサは俺の両頬を手で引っ張る。

怒つてているからか、子供なので力加減が分かつていないので結構痛い。

これと同じことをつい先日アリシアにやつたわけだが、今後はほどのことがない限りやらないようにしよう。これは本気でやられると痛い。子供だつたら泣いてしまうかもしれないくらいに。「アリサちゃん、暴力はダメだよ!？」

慌てた様子で割つて入ってきたのは月村すずかである。

大人しそうな顔をしているが、こういうときは積極的に動いてくれ

る心優しい少女である。ごく稀にいたずら染みた発言をしてアリサあたりを困らせることがあるが、基本的に良い子なのに変わりはない。

「失礼ね、今のは暴力じゃないわ。あたし達なりのスキンシップよ」「痛みの伴うスキンシップはどうかと思うんだけど?」

「う……悪かつたわよ」

「謝る相手は私じゃなくて夜月くんでしょ?」

この世界でも相変わらず仲の良いことで。まあ仲が悪かつたら違和感が凄いことになるんだが……。

とはいえる、仲が良かつたとしても別の感情は生まれてしまう。いくら見た目や性格が同じでも、ここにいる彼女達は俺の知っている彼女達とは別の存在だ。

積み上げてきた思い出もなければ、関わり始めた時期も違う。きっと俺の知っている未来にはならないのだろう。分かっていたことではあるが……親しくしていた人間なだけに悲しいと思う。

「ちよつ夜月……そんなんに痛かつたの? わ、悪かつたわよ」

「え? ……ああうん、別にいいけど。こっちにも非があつたし」

「急に何事もなかつたような顔するんじゃない。罪悪感で満ちていたあたしの気持ちは、いつたいどこに向ければいいのよ!」

「どっこにも向けなければいいと思う」

俺の言葉にアリサは頭を搔き筆り始める。

お嬢様にあるまじき行為だとは思うが、暴力なしで彼女のストレスが発散されるのならそれに越したことはない。毎日のようにしていふると頭皮や髪が心配になるが。

「アリサちゃん、どうかしたの?」

さすが全力全開がモットーのような高町なのはである。

触らぬ神に祟りなし、という言葉を無視するかのように自然に怒れるアリサに話しかけてみせた。俺の知るのははちよくちよく人のことを意地悪だとが言つて絡んできた覚えもあるが、もちろんこのなのはではない。

まあ……まだあまり話してないからだろうけど。正直魔法に関わ

らなければ前の世界でも親しくなることはなかつただろうし。

「聞きなさいよなのは、こいつが暗い顔をしていたから謝つたのに次の瞬間にはケロッとしてたのよ！」

「えつと……部分的にしか分からなかつたけど、怒るのは夜月くんの話をきちんと聞いてからでもいいんじゃないかな？ 暗い顔してたのなら理由だつてあるだろうし」

なのはさん、さりげなく矛先をこつちに戻すのやめてもらえませんかね。

それに暗い顔をしてたときに考えてたことは話せるものじやないんですけど。話したら話したで本気で心配されそうだけさ。それはそれで嫌なものがある。

「そ、それは……そうね。ねえ夜月、何があるの？ あるなら言つてみなさいよ」

「悩み事がないとは言わないので、バニングスに言つても意味がない」「な……人が心配してやつてるつていうのに何であんたはそういう言い方するわけ。あたしのことが嫌いなの！」

「いや、嫌いじゃない」

むしろ現状で言えば、このクラスの中では最も話しているのではないだろうか。

それ以外でも人間に好感が持てる奴だし。まあツンケンした状態で絡んでこられたら嫌だけど。ただそれがなければ割とさつぱりとしているというか、変に気を遣わないで話せるし。

「素直じやなさそうだけど、優しい子だつたのは話せば分かるし」「なつ……」

「あ、アリサちゃん顔赤くなつてる。もしかして……」

「う、うつさいわよすずか！ そういうんじやないんだから勘違いしないでよね。というか、本人も居るつていうのに何言つてんのよ！」「うん？ アリサちゃん、そういうのつてどういうこと？」

「なのは、あんたにはまだ早いわ」

「え、何で真顔で言うの!?」

……何だか懐かしさを覚えるやりとりだ。違う存在だつていうこ

とは分かつて いるけど、やはり本質は変わらないのだろう。

これからこの子達は 色んなことに関わる。特に ののはは……

魔法に 関わら ない ようにすれば、普通の女 の子として 地球で過ぐるのだろう。アリサ やす かも 魔法を 知らずに、この3人で 大学まで進んで そ れぞれの道を歩む。そんな 未来が訪れるのかもしれない。

だけど……ジユエルシードを 巡る事件は俺が代わりを務められたとしても、そのあとは どうなるだろうか。なのはが 高い魔力を持つていることは現時点で 分かつて いる。なら 主のためにあの騎士達はこの世界でも 罪と分かつて いても 行動するだろう。

ならば……魔法と 出会い、フェイトにぶつかつて 戦う力を身に付けていた方 が 安全なのでは ない だろ うか。何も 知らずに 襲われれば、恐怖を覚えてしま う可能性だつて ある。フェイト やはやて とい うあちらの世界に 居た 親友をふたりも失うことにもなるのだ。

それに……順当に 進めば、あのふたりはこの学校に 通うことになる。そのときになのはが 避ける ようなことになれば、あのふたりが気まずい 思いを する。すずかははやてと繋がりを持つだろ うから立場的に居た 堪れな いことになるだろ う。

「……はあ」

「夜月くんも 何で そこでため息吐くのかな!」

「やれやれ……なのはは 本当に お子様ね。ため息を吐く前の夜月の視線で 気づきなさいよ。夜月がかわいそ うじやない」

「え? え? どういうこと!?

「何でもないよ。バニングス、そういう意味で見てたわけじやないから

だから 疑うような面白がるような目を 向けるんじやない。

まつたく……お前は 実年齢よりもマセてる奴だな。まあお嬢様故に精神年齢が高くなるのは仕方がないことなのかもしれないけども。でもすずかを見習えよ。微笑ましい光景を見るかのように笑つてるんだから……これはこれで 実年齢に合つていない 気がするが。

「ふーん……まあ そういうことにしといてあげるわ。ところで 夜月」「ん?」

「何であんたって人のこと苗字で呼ぶわけ？」

「……別に深い意味はないけど。親しくもない相手を名前で呼ぶ方がおかしいと思つてるだけで」

さすがに子供の頃の俺より社交的というか人と話はするし、こいつらのことは好きだ。

しかし、俺が知つているこいつらと今のこいつらは見た目や中身は同じでも存在としては別。それ故に名前で呼ぶわけにもいかないだろう。

今口にしたことが大半の理由ではあるが、俺の中でのけじめとしての理由もあるわけで……そもそも別に人のことをどう呼ぶかなんて本人次第なんだからそんなに疑問を持たなくてもいいと思うのだが。まあ……とある栗毛の少女は名前を呼べば友達！ つて人なので名前で呼んでもらいたい人なんだろうけど。

そのへんは今近くにいる彼女も変わりないようで、ちょっとそわそわしている。

「まあ納得は出来る答えね。でも普通苗字で呼ぶにしたっさん付けとかが普通じゃない？ 呼び捨てにするなら下の名前でしょ」

「俺が普通じゃないみたいな言い方しないでもらえるかな。そもそも……どう呼ぼうと俺の勝手だと思うんだけど。別に悪口みたいな呼び方しているわけじゃないんだし」

「そうね。でもあたしのことは名前で呼びなさい」

「何故に？」

肯定しておきながら命令とかどういう思考をしているんだ。もしかして苗字で呼ばれるのが嫌いだとか？

まあこいつの親は金持ちだし、媚びてくる大人とかを見てて嫌な思いをしているのかもしれないが。だからといってこの場にそれを持ち込むのはどうなのだろうか。

「……どうして？」

「このクラスになつてからあんたとは割と話してるからよ。少なくともこの1年は同じクラスなんだから親しくなつておいて損はないでしょ」

「それは否定しないけど……別に呼び方はどうでもいいと思うんだけど」

「ああもう、どうでもいいって言うなら呼びなさいよ。あたしが呼んでいいって言つてるんだから。というか、何でこつちが歩み寄ろうとしているのにあなたは距離を保とうとするわけ？ 少しはそつちからも歩み寄る努力しなさいよね！」

正論を言つているようにも思えるが、ただ一点疑問が残る部分がある。

「言いたいことは分かつたけど……何で俺だけが下の名前で呼ぶわけ？ そつちも下の名前で呼ぶなら対等な条件だけど」

「そ、それは……急に呼んだらあんたが不機嫌そうになるかもって思つたからよ。別に恥ずかしいとか思つたわけじゃないんだから」

顔を赤くしてそういうことを言つても説得力がないんだが。

やつぱりこの世界のアリサも言葉は素直じゃないけど、態度は素直な奴だ。大学に通う頃には大分落ち着いてるというか、今ほど感情的ではなくなるんだろうけど。

「ま、まあ別に今すぐ呼べとは言わないわ。少しずつでいいから努力しないよね。あんただつてこのクラスの一員なんだし、あたしの知り合いに入るんだから」

「はいはい、善処しますよ」

「善処つて……」

「アリサちゃんだけずるい！ 夜月くん、私とも名前で呼び合おう！」
さすがは高町なのはさんだ。

何を持つてずるいと言つているのかは分からないが、人と仲良くなりたい意欲は人一倍である。

「分かつた……考え方で」

「うん……え、考えるの!?」

「まあまあなのはちゃん。夜月くんは少しずつ距離を詰める方なんだよ。だから気長に頑張ろう。私もそうしてるし」

「え……すずかちゃんつて夜月くんと仲良くなろうとしてたの？」

「え、ああうん……夜月くんも工学に興味があるみたいだからそれで」

だよね？

みたいな目でこつちを見ながら恥ずかしそうにしてないでほしいんだけどな。まあこの頃のすずかはこんな感じだつたけども……。

でも男子達がな……子供の頃よりも格段に人の視線や気配を敏感に感じ取れるから少しムツとしている奴の存在には気が付いているし。まあそれはアリサやなのはと話してもあれなんだろうけど。

今にして思うと……こいつらつてこの頃から人気あつたんだな。年代的にまだ恋愛つて呼べるものではないんだろうけど。

まあ……確かに可愛いとは思うけど。

「まあね。月村とは話も合うところもあるし」

「ならすずかのことも名前で呼べばいいじゃない」

「ア、アリサちゃん!？」

「別にいいでしょ。すずかが自分から仲良くなろうとしてるつて言った奴なんだし」

「それは……そうだけど。……そういうのはもう少し仲良くなつてから……急には恥ずかしいし」

この純情そうなすずかが俺の知つているすずかになるかと思うと……少し恐怖を覚える。だつて俺の知るすずかはたまに小悪魔というか茶目っ氣を出す奴だつたし。常に絡んできたあいつらに比べたら可愛いものだけだ。

「すずか、あんた顔赤くし過ぎよ。もしかして……そういうことなの？」

「え……ち、違うよそんなんじやなくて！ もう……アリサちゃんのいじわる」

「ねえねえすずかちゃん、そういうことつてどういうこと？」

「それは……なのはちゃんにはまだ早いと思う」

「またそれ!? アリサちゃんもすずかちゃんも私のこと子供扱いしちぎじやないかな。私達同い年だよね?」

なのは……まあ仕方ないよ。アリサ達がマセてるつてのもあるけど、お前のそれは多分これから先、当分の間は直らないところだから。まあ……なのはらしいと言えばなのはらしいんだけど。

ただそれだけについ俺の知る彼女の面影を重ねてしまうかもしない。ここに居るのはが知らないことをうつかり口に出してしまえば……。

事件が始まつたならばいつかはバレてしまうことなのかもしない。管理局と接触すれば、俺の素性を説明しないといけなくなるのだから。

だがそれでも……今はまだただの小学生として過ごしてほしい。これから先……君は多くの事に関わっていくことになるはずなのだから。

第5話 「想いはそれぞれ」

「もう飽きた！」

と、アリシアは大声を出しながら寝転がる。

アリシアが今まで何をやつていたかというと、レイディアントノワールを使って脳内シミュレーションでの訓練だ。

レイディアントノワールは俺用に渡されたデバイスなのだが、アリシアにはデバイスがない。それに元になつた存在が魔力資質が低く、また訓練を受けたこともないため自分で行うのもきつい。そのためレイディアントノワールに補助をしてもらつているというわけだ。

丁寧にレイディアントノワールのことをレイディアントノワールと言つたわけだが、俺は略してレイと呼んでいる。

「マイマスター……飽きたと仰られていますが？」

「なら放つておけ」

「了解です」

「いやいやいや、そこは放つておくんじやなくてわたしの話を聞くところでしょ！ ショウもレイもクールというかドライ過ぎ！」

と言われてもな……話を聞いたところで結論は変わらないと思う。どうせシミュレーションじゃなくて実際に訓練したいとか言うんだろうし。

「特にショウはせめて話は聞くべきだよ。まったく……女心が分かつてないなあ」

「実際に魔法を使つて訓練したい、とかでないなら聞くが？」

「う……」

その顔からして実際に魔法を使いたいんだな。

まあ……気持ちは分からなくもない。正直シミュレーションはどこまでやつてもシミュレーション。実戦とは訳が違うし、実際に魔法を使うことで得られる経験もある。シミュレーションじゃ魔力を使いつつても仕切り直せば全快する以上、本当の意味での魔力運用は身に付かないだろうから。

「この話は終わりな」

「うう……勝手に終わらせないでよ。ショウって何でそう意地悪なのかな！」

「意地悪なんかしてない」

人聞きの悪いことを言うな。

俺だつてジュエルシードを巡る事件がまだ先なら実際に魔法を使わせてやるよ。だが……あの事件が起きたのは俺が小学3年生の時の春。進級して間もない頃だつた。

つまり……前の世界と大差がなければ、もうじき事件が始まるということ。

ジュエルシードが地球に散らばつた経緯などは知つてはいるが、実際にいつ散らばつたのか。フェイトがいつこの街に来たのかまでは知らない。

それに元々俺という存在がいなかつた世界なだけに大まかな流れは同じだつたとしても、細かい部分で多少のズレがあるかもしれない。迂闊な行動は避けるべきだ。

「下手したらすでにフェイトがこの街に来てるかもしれないんだ。別の世界で訓練するならともかく、このへんじやできるわけないだろ。結界を張つてもそれで俺らの存在が知られることになるわけだし」「それは……そうだけど」

アリシアの顔を見る限り、そのへんは理解しているようだ。それでも我が侶を言つてるのは、おそらく今の生活にストレスを感じているからだろう。

まあ……無理もない話なんだが。

アリシアは性格的に色々とやりたいと思つてゐるはず。だが現状では流れを乱すようなことは可能な限りしないということで、基本的に外には出ていない。出たとしてもリニスさんの手伝いで洗濯物を取り込む時くらいだろう。

俺は学校に行つてゐるし、リニスさんは買い出しなどで外出する。アリシアもリニスさんと一緒に行くことが出来れば多少は改善されるのだろうが……。

「ショウさん、どうにかなりませんか？」

「リニスさん……」

「アリシアさんも外に出ではいけないと分かっているとは思います。でもずっと家の中というのも窮屈だと思うんです」

「それは俺も思つてますが……」

使い魔としての特徴がなくなつてているリニスさんと違い、アリシアはアリシアのままだ。

リニスさんなら彼女が惚ければ他人の空似で済まされる可能性はあるが、アリシアは少し幼いとはいえフェイトと瓜二つ。髪色や声に至るまで見れば誰もが姉妹と思うだろう。

そんな彼女がフェイトと接触すれば何が起こるか分からない。

確かにこの時期のフェイトはアリシアの存在を知らない。アリシアの記憶を持つてはいるだろうが、それを自分の記憶だと思つていいはず。

もしアリシアの存在がフェイトやプレシアに知れれば……俺達の知らないところでフェイトが捨てられてもおかしくない。

この時期ではプレシア以外に精神的な支えはなかつたはずなので、そうなればフェイトは生きることも諦める可能性もある。アルフと一緒に居るとは思うが……性格的にプレシアに向かつて行つて消滅させられる事態も考えられる。

魔法を使って変化していたとしても、魔力といった反応でバレるだろう。それだけに……いや待てよ。

俺は難しく考え過ぎなのではないだろうか。別に見た目を変えることは魔法を使わなくてもできる。本人の意思次第ではあるが、その意思があるなら外を出歩くことも出来るのではないだろうか。

「アリシア」

「うん？」

「お前、外に出たいか？」

「出たいかつて……それは出れるなら出たいよ。でも……出ちゃ不味いのは分かつてるし」

俺はアリシアに対して出ると言つてる派のようなものだが、今み

たいに我慢している子供みたいな顔をされると居た堪れない気持ちになる。

「確かに今のお前が出るのは不味い。魔法で変化させても調べられればバレるしな」

「だから……分かつてるとよ」

「なら……お前が物理的に姿を変えてもいいと思つてのなら外に出てもいいんじゃないか」

「え……物理的に？」

「髪を切るとか染めるとか、カラーコンタクトを使うとか……そういうのを使えば顔立ちは似ててもフェイクとは別人に見えるだろ」

バレる奴にはバレるかもしれないが、そのまま出歩いたり魔法を使うよりは怪しまれることはないはずだ。

もしも……アリシアの外出が理由で流れに影響が出てしまつたらそのときは

「確かにそうかもしけないけど……でも出歩いたらそのぶん影響が出る可能性は高くなるし」

「いいよ別に」

「でも……」

「でも、じゃない」

自分から我が侶を言ってたくせに、いざ話が進むとなるとやめてしまおうとするのはやめてほしいものだ。

確かに俺はある子達に少しでも幸せな時間を過ごしてほしいと思つてているが、この世界ではアリシアの方が身近に居る人物だ。明るい笑顔が似合うだけに暗い顔をされると嫌に思つてしまう。

「ストレス溜められて絡まる方が面倒だし、ご近所にいつも家に居るつて思われてもリニスさんに変な誤解が生まれるかもしれないからな。そういう意味で多少は外に出るべきだ」

「ショウ……本当の良いの？」

「お前が今の姿から変わればな……今後予想通りに進むかは分からないんだ。流れが変わつたら変わつたでどうにか出来るように努力するだけさ。だから……あんまり気にするな」

本気である子達の幸せな時間を願うならアリシアにも厳しくるべきなのだろう。

だが……この世界にとつて俺は異物。俺のことを最も理解できるのは同じ境遇であるアリシアやリニスさんだけだ。

ふたりも目的は同じ。だけど……ふたりに我慢をさせて、苦しい顔を見ながら目的を果たすのは何か違う気がする。

そもそも……俺の思う幸せがあの子達にとつての幸せとは限らない。

俺がやろうとしていることなんて余計なお世話なのかもしない。もしもあのときこうしていたなら、こう出来ていたなら……そんな自己満足を行うためにここに居るのだから。

それを抜きにしてもあの子達は自分が幸せになりたいと思う人間じやない。他人が苦しんでいるなら自分が苦しんでも助けたいと思う人間だ。アリシア達の存在が知られてそれまでの経緯を知られた時、きっとアリシアを閉じ込めるような生活をしていたと知れば間違いなく怒るだろう。

ならある程度好きにさせた方がみんなが笑顔になれる気がする。流れが変わってしまったのならそのときに出来るだけ努力すればいい。

たとえ後悔するようなことになろうとも……俺は人間であつて神ではないのだから。

「ショウ……ありがと」

「別に。勝手にあれこれされるよりはマシだからな」

「む……素直じやない。でも今日は許してあげる。それと……もうしばらくは外に出るの我慢する」

「アリシアさん……せつかくお許しが出たのにいいんですか？」

「うん。わたしだつてあの子達に幸せになつてほしいし……あの子達よりもお姉さんだからね。レイやリニスも居るし、大丈夫だよ」

少し強がつているように見える笑顔だが……まあここでそれを指摘するのは野暮なものだろう。

時期的に妹であるフェイトが流れの中心になる。ここでの流れは

今後の彼女の人生に影響を与える可能性が高い。それだけにアリンシアにとつては最も重要な時期な気がする。

それに……自分でお姉さんだつて普段から言つてるからな。

あとあとバカにされないようにしようとしているのか、それともそういうやりたいという願いを込めて自分を励ましてているの言葉なのか。まあ何にせよ……本人が強くそう言うのなら好きにさせるべきだろう。別に俺にとつては悪いことではないし、俺達の目的を基準にすればプラスのことなのだから。

「ところで……何でリニスさんは若干泣きそうになつてるのかな？」

「い、いえ何でもないんです。おふたりの優しさや想いが胸に来ただけで……」

いやまあ……確かに良い話風な流れだつたといえればそうだけど。でも涙ぐむほどのことはやつてないよね。

まだあの子がこんなに成長して……、と言えるほどリニスさんと一緒に暮らしてはいないし。そもそも保護者的立場になつてもらう人ではあるけど、厳密には保護者でもない。そもそも……精神年齢とかで言えば俺もそう変わらない気がする。

「私、おふたりを支えられるように頑張ります。それがきっとフェイント達のためにになりますし……おふたりにも幸せになつてほしいですから」

「リニスさん……わたしやショウだつてリニスさんのこと支えるよ。一緒に目的を果たす仲間だし、一緒に暮らしてる家族なんだから。リニスさんにも幸せになつてほしいしね」

「アリシアさん……」

「リニスさん……ガシン！」

…………何をやつているんだろうかこのふたりは。

何やら良い雰囲気を出して抱き締め合つていてるけど、アリシアがガシ！なんて口にしたせいか茶番にしか見えない。だがリニスさんは割と真面目にしているので……何ていうか噛み合つてない。

「…………」

「……チラ……チラ」

アリシア、チラチラ言いながらこつちを見るな。

何だよそのショウもこの中に入りなよ！ みたいな目は。いいよ別に俺は。茶番に付き合いたいとも思わないし、感極まっているわけでもないから。

「マイマスターはふたりの間に入らないのですか？ 先ほどからアリシアさんがそのような目で見てますよ」

「レイ、そういうことは言われなくとも気づいてる。あえて無視しているんだ」

「何故ですか？」

真面目というか人間性に興味を持つてているというか、淡々とした口調なのにあれこれ聞いてくるなお前も。

何故って……単純に言つて恥ずかしいからだよ。

アリシアだけならまあ割と引つ付いてくることはあるし、前の世界でもはやてやレビューと密着する奴は居たから構わない。だがさすがにリニスさんからされるのは精神的によろしくない。見た目も中身も大人だし。

「ははくん……ショウ、リニスさんのこと意識してるんでしょ。子供のくせにマセちゃつて。もしかしてリニスさんみたいな人が好きなの？」

「え、そうなんですか？ どうしましよう……私はショウさんの保護者の立場にありますし。でもショウさんが子供なのは見た目だけで」「アリシア、面倒な方向に話を振るのはやめる。それとリニスさん、そんなに本気で考えなくていいから」

俺がもつと大きくなつてからなら年の差カップルとして認識されるだろうけど、今すぐはリニスさんがショタコンみたいな感じになるからね。普通の人は俺を小学生としてしか見ないから。

「マイマスター、マイマスターは私のマイマスターです」

「え、ああうん……そうだな」

「リニスさん今の返事聞いた？ ショウつて本当に女心分かつてないよね」

「そうですね。今のはちょっとレイさんがかわいそうだと思います。……決めました。私、今日からショウさんに女心を教えていきます！」

……はい？

「え、な、何でそういう答えになるのリニスさん？」

「一応保護者の立場ですし、ショウさんが女の子を傷つけるような言動をするのはよろしくありません。なので私が立派な男性にしてくれます……まあ今でも十分に素敵だとは思うんですが」

リニスさんは顔を真っ赤にしたかと思うと、両手を頬に充てて悶え始める。

「リニスさん！ 今のリニスさんって使い魔だった頃のリニスさんとは違うんだよね？」

「はい、違いますよ。使い魔だった頃のように耳や尾はありませんし」「じゃあ……何で急に発情した猫みたいに急にショウに対して『デレ』レになつたの？」

アリシア、確かに俺も気になつたけど……それ聞いたやう。答えるによつては俺が結構困るんだけど。

「それは……やっぱり私も女ですから。女性として意識されたら意識するとと言いますか……ショウさんの中身が大人だということも知つていますし」

「いやいやいや、それだけでそこまで『デレ』るのはおかしいと思うよ!? ショウが元の姿のままならまだ分かるけど。今は完全に見た目は子供だよ。リニスさん、ショタコン? ショタコンなの?」

「人聞きの悪いことを言わないでください。確かに小さい子を見ると微笑ましいと思つたりはしますが、ドキドキはしません」

そこはドキドキしてほしかつた。

そうはつきり言われると俺くらいにしかそういう感情を抱かないということで、俺としても余計に意識してしまうというか。

何だろう……リニスさんつて人がよく分からなくなってきた。眞面目で優しい人なのは間違いないんだけど、何か変な茶目つ気が混じつてるというか。この世界に来るに当たつて使い魔だった頃の要

素の代わりに何か別のが混じつたりしてないよな。

「そそそれって……つまり本気でショウを」

「はい、そうですね。男の子として見てる部分もありますが、中身が中身なので男性としても見てますよ。先ほどのアリシアさんとのやりとりからも分かるとおり、人として好きですし。今後アリシアさんが思うようなことに発展する可能性は否定しません」

「な……わ、わたしの目の黒いうちはそういうことにはさせないからね！ 何ていうか目の前でイチャイチャされると癪だし！」

話が凄まじくおかしな方向に進んでいるような気がするのだが……。

リニスさんは割と本気なんだろうが、まあ今は子供としても扱っていると言っているわけだし。すぐにどうこうなるということはあるまい。

だからアリシア……そんなにムキになるな。今のお前は凄く子供っぽいし、他の人から見たら誤解されかねない言動をしているぞ。お姉さんならもう少し落ち着きを持って。

「レイも女の子ならそう思うよね！」

「私は機械なので女の子扱いされるのはあれですが……マイマスターに構つてもらえなくなるのは嫌ですね」

「ふふ、ショウさんモテモテですね」

「あのさリニスさん……この発端を作ったのあなただよね。微笑まいものを見るように笑うのはやめてほしいんだけど」

第6話 「今後の始まり」

人々が寝静まつた真夜中。逃げる黒い何かをひとりの少年が追っている。服装はどこかの民族のような格好だ。

少年はボートが置かれている橋まで走る。彼の視線の先にある湖の上には、得たいの知れない存在が浮遊している。謎の存在は少年の気配に気づいたように振り返った。少年は手に持つ赤い宝石を握り締め、真っ直ぐに黒い何かを見つめる。

『お前は……こんなところにいちゃいけない』

少年が謎の存在に向けて腕を伸ばすと、手にある宝石が発光し始める。

『帰るんだ、自分の居場所に……』

少年の手の先に淡い緑色の魔法陣が展開する。それと同時に、黒い何かに鋭い眼が出現し、咆哮を上げて詠唱する少年に向けて突撃した。魔法陣と衝突し、凄まじい音と衝撃が発生する。

少年が「封印！」と唱えると謎の存在は消滅し始め、核となつていると思われる青い宝石が姿を表した。だが消滅する直前、謎の存在は姿を取り戻す。それを目撃した少年は驚きの表情を浮かべた。

少年から距離を取つた謎の存在は、散弾のように身体を弾けさせた。弾丸と化した謎の存在の一部一部が少年に襲い掛かる。少年はどうにか回避するが、肉片は橋やボートに着弾し破壊していく。

『くつ……』

避けるのが困難だと判断したのか、少年は防御魔法を発動させた。そこに複数の肉片が着弾し煙を上げる。あまりの威力に防御魔法を貫通したのか、少年は吹き飛ばされて宙を舞い、林の中に落下していった。

謎の存在は獰猛な笑みを浮かべた跡、その場から飛び去つて行つた。

地面に倒れている少年は追いかけようとするが、体力の限界が来たのか伏した。その後、少年の身体が発光し、動物へと姿を変えて行つた。



「ショウ、おつかえり。学校は楽しかつた？」

「ただいま……二度目の学校生活が楽しいと思つてゐるのか？」

「小学校の勉強はともかく、学校生活が樂しいかどうかはショウ次第だとわたしは思います！」

確かにそのとおりではあるが……ない胸を張つて偉そうにするな。

「はいはいそうですね」

「む、何でそういう反応するかな。ショウはわたしのことを何だと思つてるの？」

「……意外と手間のかかる同居人？」

「ひどっ!? わたしが思つていた以上に距離のある言い回しにわたしの心は傷ついた。わたしそんなに手間のかかる女の子じやないよ！」

いやいや、それは自分の評価を間違つてると思うぞ。

俺の記憶が正しければ、割と毎日のように俺はお前を起こしに行つてゐるし、風呂上がりには髪の毛を乾かすのを手伝つたりもしている。それでよく手間のかからないなんて言えるよな。

「なのでわたしは訂正を要求する。訂正するまでわたしはここを動かないから」

「あつそ……」

「待てい！」

アメフトのタックルのようにアリシアがしがみついてきた。

元の体格なら問題ないはないのだろうが、今の俺は小学生3年生。つまりアリシアとの体格差はあまりない。故に全力でしがみつかれると衝撃は凄まじく、また感じる重さもなかなかのものになる。服とかも伸びるし本当やめてほしい。

「何でわたしのことを無視して上がろうとするのかな？」

「何で自分の家なのに上がるのにお前の許可がいるのかな？」

「それはその……わたくしたちなりのスキンシップだからだよ！」

「こんな無駄なスキンシップは要らん」

「ガーン!？」

その無駄に大きなリアクションも必要ない。

大体な本当にショックを受けた人間はそんな風に擬音語で訴えてはこないんだよ。その手のパターンは前の世界で小さな狸に散々されたから慣れてるし、俺にやつても効果は薄いからな。

「ひどい……ひどいよ。わたしが遊べる相手はショウカリニスさんだけなのに」

「だつたらもつと素直に甘えてこい。まだその方が構つてほしい妹に見えるだけに可愛げがある」

「べ、別に構つてほしいとか思つてないし！ というか、わたしの方がショウよりもお姉さんなんだから。妹扱いしないでよね！」

だつたらもつとお姉さんらしく振る舞つてほしいのだが。

俺の経験上、自分でお姉さんぶる奴はあまりお姉さんと思えることがない。むしろ元気に振る舞つているが、根っこは寂しがりの甘えたがりだ。

「分かつた、分かつたから落ち着け」

「全然わかつてない……もう、そういう言い方するから友達が増えないんだよ」

「自分を偽つてまで作る友達が友達つて呼べるかは微妙だけどな」

それに……見覚えのある顔が多いだけに親しくしていいものか迷つてしまふ。

この世界のあの子達は見た目や考え方は同じでも俺の知っているあの子達ではない。知つてゐる顔もあれば知らない顔もある。

それは単純に俺があの子達のことを時期的にあまり見ていなかつただけかもしけないが、それでも元の世界とこの世界とでは関係性が違うのだから異なる点はあるだろう。

だからこそ……俺はこの世界のあの子達に俺の知るあの子達を重ねて見ることに罪悪感を覚えるのだ。

でも俺は重ねて見るのをやめない。重ねないようにして重ねて見てしまう。そうでなければ、己の知る流れよりもより良いものに変えるために行動しようとはしないはずだから。

「それより……今日からは一段と気を付けて過ごせよ」

「分かつてるよ。あの夢はわたしも見だし、流れが変わつてなければ

今日はジュエルシードを巡る戦いが始まるんだよね？」

「帰り道にユーノをあいつらが見つけていたし、ほぼ間違いなく今日から始まるだろう」

「……ショウは本当にいいの？」

「何が？」

「何がってあの子を……なのはを魔法に闇わらせること。ショウがなのはの代わりなれば事件は早く解決すると思うし、今後なのはが大きな怪我をする可能性は本来の流れよりも低くなる気がするし」

確かにアリシアの言うことは一理ある。ただ……危険なことから遠ざけるだけが良いとは限らない。

今の俺ならなのはの代わりにジュエルシードを集めることは可能だろうし、フェイトとぶつかっても負ける可能性は低いだろう。

だがそれは同時に俺の知る流れと比べるとフェイトから大切な友人をひとり奪うことにも繋がりかねない。

それに俺はなのはとは違う。なのはの居たポジションになつたらといつてなのはと同じようにフェイトに向き合い、フェイトの心を揺さぶれるとは限らない。

加えてジュエルシードを巡る事件以降もきっと様々な事件が起ころ。そこにはがいないと考えると知つていてる流れよりも悪い方向になる可能性だつてあるのだ。なら……

「なのははフェイトにとつて大切な存在になるし、なのはにとつても魔法はあいつがあいつらしくあるために必要な要素だと思う。それに……俺達の知つているように進んでいくかは分からない。そのときなのはが居るのといいのとでは結果が変わってくるかもしれない。だから……なのはにはこのまま魔法と闇わらせる

「そつか……なら今後どうするつもりなの？」

「そこが微妙に迷いどころだ」

今後のことを考えれば事件の絡む必要がある。

だがこの世界での俺の境遇がはつきりしていない。元の世界ではリンディさんと繋がりがあつたし、義母さんが技術者として働いていたから繋がりがあつた。

しかし、この世界ではナイトルナ家は俺の親戚として存在している。リニスさんが俺の親戚ということになつていてと言つていたからこれは間違いない。

他に分かっていることは、どうやら俺にはデバイスマイスターの資格があるということ。俺の両親は魔法世界で過ごしていた期間があり、地球に引つ越してきた後に亡くなつていることなどだけだ。もしかすると神という存在が都合良く繋がりを作つてくれているかもしれないが……今回の事件に関わるであろうリンディさん達と繋がりがあるかは定かではない。

それに現状ではまだ被害らしい被害は出ていないのだ。今すぐリンディさん達にコンタクトを取るのは悪手である可能性が高い。コンタクトを取るならば事件が始まつてから管理局に連絡を入れ、それで駆けつけるであろうリンディさん達と取るべきだ。

「ただ今日に関しては非常事態が起きない限りは傍観するさ。今回の事件で最大の狙いはプレシアを生存させることだしな」

「そうだね……フェイトにしていたことは知らされてるけど、本當は優しい人だし。お母さんを助けたことでどう転んでいくか分からぬいし、フェイトが一緒に過ごせるかは分からぬけど……それでも少しでいいから一緒に過ごしてほしい。フェイトにはフェイトとしてのお母さんとの思い出を作つてもらいたいから」

この時期のフェイトは、アリシアのクローンとしての自覚がない。アリシアの思い出を自分の思い出だと思つている。

それだけにプレシアから真実を告げられた時、あそこまで狼狽えて心が壊れそうになつてしまつた。

それでもあの子はプレシアの元を訪れ、自分の考えをぶつけた。そのあとはあのような結末になつてしまい……プレシアとの良い思い出はない状態で生きていくことになつた。

俺の知るフェイトが幸せでなかつたとは言わない。不幸なことがあつたとはいえ、あいつが浮かべていた笑顔は本物だつた。

ただそれでも……母親との思い出は大切だ。

思い出があつたからこそ、俺は両親が死んだ後も悲しみに耐えて過

ごせた。義母さんが一緒に居てくれたのも大きな要因ではあるが、思い出も重要な要因なのは間違いない。

それだけにアリシアの願いは理解できるし、それを叶えてやりたいと思う。

「……ショウ、どうかした？ わたしの顔に何かついてる？」

「別に。ただ今のお前は少しだけお姉さんっぽいって思つただけだ

……何だよその顔は」

「いや、その……ショウがお姉さんだつて認めてくれるような発言をするとは思つてなかつたから。もしかしてデレ期？ わたし、ついにショウのこと攻略しちゃつた？」

「……正直に言えば、お前への好感度は今の言葉でダダ下がりだ」ふと思つたのだが……こいつとはやてを会わせるのは危険ではないだろうか。

この世界のはやてが俺の知るはやてと同じかは分からないが、なのは達が同じ性質である以上……この世界のはやても親しくなれば茶目つ気を出してくる可能性が高い。

つまり……時期が来ればアリシアも表立つて行動し始めるだけにはやてと絡む機会もあるだろう。性根というか行動指針に似ている部分がありそうなだけに揃うと面倒な展開になる気がしてならない。

「今回の事件が終わつたらこの家から放り出してやる」

「ちよつ、それはいくら何でも言い過ぎじやない!? ここ以外に行く当てとかないんだけど!」

「だつたら人をおちよくるような言動を控えろ。それだけでお前への好感度は大分変わる」

「自分を偽つて好かれてもあんまり嬉しくないかなー」

氣の抜けた顔と声に苛立ちもしたが同時に毒氣を抜かれるような氣分にもなつた。何というか、脱力した時のアリシアは少しレビューに似てゐるかもしねれない。

なのはやフェイト達のことばかり考えていたが、この世界にレビイ達が居るのだろうか。

可能性で居てもおかしくはないし、俺の知る世界とは異なるのだから

ら居なくともおかしくない。ただ居るにしても居るのは魔法世界だろう。今すぐ出会うことはないはずだ。大体出会つたとして俺にとつてこの世界のあいつらは……

「何だか暗い顔してるけど……やつぱり迷ってる？」

「いや……今夜のことやプレシアのことにも迷いはない」

自分の思う幸せがあいつらにとつての幸せとは結び付かない。

ただ少なくとも……俺の知るあいつらは苦しむことはあつても自分の目標を持つて生きていたし、幸せそうに笑っていた時がある。なら大きく流れを変える必要はない。

ほんの少しでも幸せな時間や思い出を増やすことが出来れば、それだけで十分なのではないか。

俺は全知全能の神ではない。やれることには限度がある。それに悲しみや苦しみだって人を成長させることに必要な時もあるのだから。

「なら何に迷ってるの？ あんまり考えてばかりだと剥げるよ」

「……俺を悩ませる原因のひとつにお前も入ってるんだけどな。つまり剥げたらお前のせいだ」

「いやいやいや、その理論はおかしいというか抗議なのだよ！ あくまでわたしは要因のひとつなんだからわたしだけが原因じゃないよね。というか、わたしが剥げさせれる要因ってどういうこと!?」

「それが分からぬから要因なんだよ……つて、だからしがみついてくるなよ。どんだけ構つてちゃんなんだお前は」

「構つてちゃんじやないし！」



その日の夜。

予想していたとおりユーノからの念話が聞こえた。十中八九、のははユーノを預けた動物病院に向かい始めてるだろう。

「さて……俺も出発するか」

相棒であるレイディアントノワールを首に掛けて外へと向かう。

基本的に今日は何もするつもりはないが、なのはが無事にジュエルシードを封印できない可能性はゼロではない。まあ高い魔導師とし

ての適性と感覚で魔法を使えるセンスがあるだけに俺が介入しなければならない可能性の方が低いだろうが。

「……ん？ アリシアにリニスさん、ふたり揃つてどうかしたのか？」
「どうしたのつて見送りにきたんだよ。まつたく……ショウはそのへん鈍いねえ！」

どうして質問ただけでここまで馬鹿にされなければならないのだろう。帰ってきてからのやりとりをまだ根に持っているのだろうか。だとしたら実に大人気ない。見た目は俺よりも子供に見えるが、自分の方がお姉さんだというのならもつと大人らしい振る舞いをしてほしいものだ。

「ふふ、気にしないでくださいね。こう見えてアリシアさん、ショウさんのことが心配なんですよ。さつきもちやんとショウさんが帰つてくるよねつて……」

「わあ！ わあ！ わあああ～!? リニスさん、そういうことは言っちゃダメだよ。ショウ、勘違いしないでよね！ 別にわたしはショウのことなんて心配してないだから！」

ならもつと平然とやれよ。

そこまで動搖されたら本心が真逆なのは誰だつて気づくと思うぞ。というか……どうして某金髪のお嬢様のような言い回しなんだ？

世界の流れを把握しているだけに知つてもおかしくはないが、少なくとも本人との面識はないはず。ここで彼女の口調を選択する意味が分からぬ。無意識に出たので大した理由はないのかもそれないが。

「あつそ……ならちゃんと留守番してろよ」

「む、何でそこで子供扱いするかな。そういう言い回しがわたしの心を傷つけてるつて理解し……」

「ちゃんと帰つてくるさ」

そう言つてアリシアの頭を軽く何度も叩く。

ほんの少し前まで俺のことを父親のように慕う少女に似たようなことをしていたせいのか、少しばかり懐かしい気持ちになる。アリシアがあの子と同じ金髪だからなのか、それともアリシアが見た目より

も子供らしいからなのか。

まあどちらにせよ、これは口には出さないようにするべきだろう。俺の同居人は子供扱いしたら怒るし、この世界で数少ない俺のことを理解してくれる存在なのだから。

「今日は見守るだけだし、仮に何かあっても大抵のことはどうにかしてみせる。だから大人しく待つてろ」

「……分かった。……今みたいなことを自然にしないでよ」「ん？」

「何でもない！ ちゃんと帰つてこないとただいまって言えないって言つたの！」

「そ、そうか……」
それならいいんだが……そんなに怒鳴る必要はないと思うのは俺だけか？

それに……リニスさんの浮かべている笑顔が意味深に思える。リニスさんはアリシアの隣に立つていて、アリシアの言つたことが聞こえたのかもしれない。

だがそうなると今のアリシアの言葉が本当に言つたこととは別という可能性が高くなる。

しかし、そこに突つ込んだところでアリシアが本当のことと言ふとは思えないし、そこまで興味があるかといえばない。下手に機嫌を損ねた方が面倒なだけにここは気にしないことにしよう。

「じゃあ行つてくる」

「はい、行つてらっしゃいませ」

「行つてらっしゃい。寄り道しないで帰つてくるんだよ」

俺は子供か。

と言いたくなつたが、見た目とこの世界での年齢は子供だ。アリシアの性格的にそこを突いているだろうし、それ以上にあまりここに時間を持つけるわけにもいかない。

ある意味今日の出来事が今後の流れが自分の知るものと比較する大切な要因のひとつになる。それだけに早めに行つて観察しなければ……

「言われなくとも分かってる。補導なんかされたら面倒臭いからな
……行つてきます」

第7話 「異なる流れ」

この世界のなのはが魔法に出会つてから数日が経過した。

俺の知る世界ではなのはが魔法と出会い、初めてジュエルシードを封印した翌日あたりにはフェイトに遭遇するという流れだつた気がする。

ずいぶんと昔のことなので確實だとは言えない。ただそれでも……ここまで次の騒動が起つるまでに時間は空いていなかつたはずだ。

この世界にとつて俺は本来存在しない。その段階で俺の知る世界と流れが異なるのは当然だと言える。それは理解できているつもりだ。

しかし、アリシア達が言うには大まかな流れは変わらない。なのはが魔法と出会えば必然的にフェイトとジュエルシードを巡つて争うことになる。そういう流れのはずだ。

まだフェイトがこの世界に来ていなかつたのか……単純にジュエルシードが暴走して起こる事件がないだけなのか。情報が少ないだけに判断に困る。

「……いや」

変に考え過ぎてもダメだ。

同じ顔があつてもそれは俺の知つてゐる人物とは別人。それに俺には未来を予知できるようなレアスキルはない。今後起きる事を予想は出来ても断定することは出来ないのでから臨機応変に対応するしかない。

「まあ……」

ジュエルシードの暴走やらフェイトとの遭遇なんてことがないと介入もしにくい。ジュエルシードを巡る事件は始まつたのだから管理局に連絡を入れることは可能だが、今の段階で連絡すると俺の知る流れよりも遙かに早く管理局がこの事件に触れることになる。

そうなれば俺の知る流れとは大きくずれる可能性も高くなるだろう。それに今の状況ならあのなのはでも管理局の指示に従つて身を

引く可能性がある。なのはにとつてはある意味平和な未来が訪れるのかも知れないが、フェイトにとっては親友をひとり失うことになり……遠い先の話をすれば彼女をママと呼んで慕っていたあの子にも影響が出かねない。

それだけに……管理局に連絡を取るタイミングは重要だ。なのはとフェイトが一度遭遇した後ならなのはも事件から引かなそうなので気楽に連絡できるのだが……

そんなことを考えながら街中を歩いていると、不意に聞き覚えのある声が耳に届く。

「フェイト、あそこに美味しいなもの売ってるよ」

「もうアルフ、私達遊びで来てるんじゃないんだよ」

「少しくらいいいじやん。朝から探し回つてたんだし休憩もしないと」

自分の耳を疑つたが……視線の先には、金色の長髪に赤い瞳の少女と橙色の長髪のすらりとした女性が確認できる。俺の中では身長差が逆転しているが間違いなく俺の知る過去のふたりと同一の姿だ。

唯一違う点があるとすればフェイトの髪型くらいだろう。俺の知る彼女はこの頃はツインテールをしていることが多かつた印象だが、今日の前に居るフェイトは髪を下ろしている。まあ特に気にすることはないのだろうが……

「……ん？ ちょっとそこのガキ、何ジロジロと見てんのさ」

「あ、その……」

まさかこのタイミングでこのふたりと遭遇するとは思つていなかつただけにすぐに言葉が出てこない。

いやそれ以上に魔導師であることがバレるのが不味い。事件が始まってからはレイも常に身に付けているし。さすがにここで戦うなんてことはしないだろうが……そんなことになると今後の流れが大きく異なつてくる可能性が高くなる。

落ち着け……落ち着くんだ。魔力を持つ人間は魔法文化のない地球にも存在しているし、魔法文化のない世界に移る住む人間は存在しているんだ。

現状俺はフェイト達とジュエルシードを巡る場面で出くわしたことはない。むやみに敵を作るような真似はしないだろうし、下手に刺激しなければ大丈夫なはずだ。

「ダメだよアルフ。そんな言い方したら怖がらせちゃう

「でもあいつが……」

「アルフ」

「……分かったよ。フェイトがそう言うなら……悪かったね」

フェイトの優しさやアルフのフェイト第一主義みたいなところはこの世界の健在のようだ。それに安心感を覚える一方で、今後なのはサイドとして敵対したときに通常よりも敵対心を覚えられそうだ。そう考えると少し憂鬱もある。

「君……ごめんね」

「いや……こっちも見てたのは事実だから。金髪が目に入ったから友達かなと思つて」

「そりなんだ……」

フェイトの瞳からは敵意のようなものは感じない。

……ただ寂しい目をしてる。この子も俺の知る彼女のようプレシアから酷い仕打ちにあつてきたのだろう。それを振り向いてもらうために今も頑張つて……

事件後もプレシアを生存させる。

それが俺の今回の事件で行うと決めたことだ。プレシアの扱いがどうなるかは分からないが、俺の知っている別れ方になるよりもずっとマシだろう。プレシアも今はまだアリシアに囚われているだろうが、フェイトへの仕打ちは重ねて見ていない証拠もある。きつかけさえあれば……

「えっと……私の顔に何か付いてるかな？」

「え……いや別に」

「あんた……まさかフェイトに対して良からぬことを考えてるんじやないだろうね。あたしの目が黒いうちはそんなこと許さないからね！」

この頃のアルフがフェイトのことになるところいう風になるのは

分かつてることだが、せめて数年後に言つてほしいものだ。

俺も含めてフェイトも同年代よりは精神年齢は高いだろうが、それでも小学3年生くらいでその手のことは考えないだろう。まあ最近の子供はそういうことも早いらしいし、一概にないとも言えないのだが。少なくとも俺やこの子には当てはまらないだろう。この子は今そんなことを意識できる時期でもないだろうから。

「ア、アルフ、だからそんなこと言つたらダメだつて」

「だけどさ……」

「それ以上言うと怒るよ」

俺の記憶にはアルフがフェイトにあれこれアドバイスするといった話が多いように思えるが、この頃はアルフよりもフェイトの方が上のようだ。まあ立場は対等でもアルフはフェイトには強く出れないといった方が正しいかもしだれないが。

「ごめんフェイト。あたしが悪かつたよ……これ以上は言わない」「謝る相手は私じゃないよ」

「……あなたも悪かつたね」

視線を合わせずに謝罪をするアルフ。本来は姉御肌というか気さくな性格なのだろうが、時期的にあまり他人を信用しようとしていないのだろう。さすがに小学生相手に今の態度もどうかと思うが……。まあ時期的にアルフは生まれてからそれほど時間が経っていないだろうし、何より今の俺は魔力を隠したりするためにリミッターを掛けたりしていな。

魔導師としての力量は現在のフェイト達よりも上と思われるのに戦闘になつても対応はできる。だが今の段階で戦闘になるのは好ましくない展開だ。

それに……魔力の有無やレイの存在はあちらもデバイスを持つているならば遅かれ早かれ確認されてしまう。フェイトのデバイスが俺の知るバルディツシユと同じならば並のデバイスよりも遥かに性能が良いのだから。

それ故に警戒されるのは仕方がない。

ただそれでも現状自分達にとつて障害になるか分からぬ段階だ

からこそ、平和的に物事を収めようとしている可能性がある。

今の俺の立場は中立だ。なのは達と接触できていないこの段階でフェイトと事を構えるのは得策だとは言えない。ここは大人しく別れる方を選択するべきだろう。

「いえ、気にしてませんから」

「本当にごめんね」

「本当に気にしてないから……じゃあこれで」



「ショウおつかれりー！　わたしの頼んでた漫画買って来てくれた？」

帰宅して早々自称お姉さんの元気な声が俺の耳を貫いた。

外出ができない時期であるため娯楽に飢えているのは分かる。外出に出たい気持ちを我慢していることも知っている。だから漫画がほしいと言われたらそれくらい買つてくる。

だがしかし……先ほど俺はこの人物の妹に当たる同一の存在と会つてしまつたのだ。こちらの方が幼い見た目ではあるが似ているし、声質だって近い。胸の内に思うところがあるのも仕方がないだろう。

「買つててくれたよね？　買つてきたよね？　ね？　ね？　ね？」

「ええい鬱陶しい。近づきながら何度も尋ねてくるな」

「そこまで言わなくてもいいじやん。確かにわたしも悪いとは思うけど、ショウがすぐに返事をくれないのも悪いのに」

「それは否定しないが時期的に考えたいことが多いのは分かるだろ。それに……前々から思つてたがお前は人との距離感が近い」

少し前まであの子の父親代わりみたいな立場に居たというのに体の年齢に引っ張られるところがあるのか、どうもアリシアに対しても意識してしまう部分がある。

思考の仕方や知識は大人でも性的な部分は肉体年齢に近くなるようにはかされたのかもしれない。まあ距離が近いだけならアリシアよりも異性との距離を考えずに接してくる奴が居たので堪えられないということはないのだが。

「別に気にするほど近くないと思うんだけど……もしかして、ショウはわたしのこと意識しちゃってるのかな？まあ無理もないけどね。わたしはショウよりもお姉さんだし、自分で言うのもなんだけど可愛いし」

苛立ちを覚える笑みを浮かべるアリシアは見た目はともかく性格は可愛いとは言えないだろう。こういうのが良いという奴が居るのならば俺は物好きだと思う。

俺の知る奴にも似たような言動をするのは居たが……あいつらは表面上というか根っこは別だつて分かつてたからな。割とアリシアは素のところも混じつている気がするし、そのせいか耐性があるはずなのに微妙にすり抜けてくる。そのうち慣れそうでもあるが……

「お前よりフェイトの方が遙かに可愛いけどな」

「なつ……そういうこと言っちゃう。今多分わたしの方が小さいだろうけど、遺伝子的には同じなんだからわたしだつてフェイトと同じよう成長しそうなのに。大体この世界のフェイトはショウの知つてるフェイトと同じかどうか分からぬじやん！」

「確かに細かい部分は分からぬが、外見や大まかな性格が違つてるのは思えない」

「何でそういう言えるの？」

「さつき会つたからだ」

予想外の言葉だったのか、アリシアはこちらを見たまま動きを止める。ただそれでも思考は続いているのか何度も瞬きを繰り返した。

「……何やつちやつてんの!? いやまあ外を歩けばその可能性はあるけどさ。ショウってなのは側で行動するつもりだつたよね？ なのは達よりも先にフェイトと遭遇しちゃうとか幸先悪すぎというか、現場で顔を合わせた時の亀裂の入り方がやばいよね！」

「それが分かつてるからあれこれ考えてるんだろ……というか、気持ちは分かるが少し落ち着け。正直近くで騒がれるどうるさい。非常にうるさい」

「段階を上げて言い直さなくともいいじゃん。大体その原因を作ったのはそっちのくせに！」

「だからどうするかを考えてるんだろ。お前はこれでも読んで大人しくしてろ」

俺は袋の中からアリシアからお願いされていた漫画を取り出す。

漫画のタイトルは『金の私と黒の騎士さん』。ファンタジー世界を舞台にした少女漫画であり、女子の間ではそこと人気のある作品らしい。まあ女子は一度は白馬の王子に憧れるものだろうし、過去に恋愛の関わる作品は数多く読んできたから気持ちは分からなくもない。この世界のあいつがその手のものが好きなのかは分からないが……ある意味そのへんが苦手な方が関わろうと身としては楽な部分があるかもしねりない。

「何やら騒いでるみたいですがどうしてんですか？」

「あ、リニスさんちようどいいところ。聞いてよショウがね……！」

「ちゃんと聞きますからまずは落ち着いてください。……それでどうされたんですか？ ショウさんがアリシアさんの漫画でも買い忘れましたか？」

「ううん、それはちゃんと買っててくれた」

「なら他にケンカになる理由つてあります？ 私の知る限りそれくらいしか原因が思いつかないので……アリシアさんはその漫画が大変お気に入りですし。あ、ちなみに私も読ませてもらっていますがお気に入りですよ。私は金髪ではありませんが、それに出てくる黒騎士さんはどことなくショウさんに似ていますしね。だからアリシアさんも新刊の発売日に読みたいほど……」

「リニスさん、リニスさん、リニスさん！ それ以上は言わないで。割とわたしの性癖というか弱みになる部分をバラしてるから。もう騒がないからそれ以上はやめて。お願ひ、どうかご容赦を〜！」

若干涙目でしがみつくアリシアをリニスさんは笑顔であやし始める。

今の発言が天然なのかそうでないのか結論が出ないだけに……リニスさんは敵に回したくないタイプだ。腹の内が読めない人間を相手にするのが最も疲れるし。

まあ俺の知るはやてやシユテルのように必要もないのにちょつか

いを出すようなことはしないだろう。だから気に障るようなことをしなければ大丈夫だとは思うが……。

「それで何が理由で騒いでたんですか？」

「それは……さつき街でばつたりフェイト達に会った」

「まあ……偶然なのかショウさんに対する試練なのか、どちらにせよ良いとは言えないことですね。現状私達は中立ですが、事件に本格的に介入すれば管理局。どちらかといえばなのはさん達の味方になるわけですし……いつそフェイト達の手伝いしちゃいます？」

「ダメ！ ダメだよりニースさん。お母さんに接触するのも難しいし、仮に上手く行つてもショウまで犯罪者になっちゃう。そんなことになつたらショウの今後がめちゃくちゃ……あ」

アリシアの顔はどんどん赤くなっていく。

先ほどまでケンカしていた相手を思つて必死になつていた自分が恥ずかしかったのか、微笑ましく見守るニースさんに思うところがあつたのか。アリシアは「とにかく行動方針は変えちゃダメだからあああッ！」と叫びながら自分の部屋に走つて行つてしまつた。

「……ショウさん」

「ん？」

「あの子は我が儘に見えるかもしませんけど、ショウさんのことを大切に想つているんです。もちろん私も……なのであまりひとりで抱え込まないでくださいね。色々話してもらつた方が私達も安心しますから」

「……分かつた。善処するよ」

「ふふ、お願ひしますね。それと……出来ればもう少しアリシアさんにも優しくしてください。私としてはアリシアさんよりも優しくしてもらえるのは嬉しいんですよ。ただ……今の段階でショウさんとそのような関係になるのは世間的によろしくないと言いますか」確かにアリシアに対してもりニースさんへの言動の方が優しい。それは自覚している。

だがそれは普段の振る舞いから來ているものであつて、別にアリシアが嫌いだからやつっているわけではないのだが。俺だつて人間なの

だから騒がしくて絡んでくる人間より家事とかを真面目にしてくれている人間に好意を持つだけであつて。

「あのリースさん……別に俺はリースさんに勘違いされるような言動はしないと思う。だからそんな心配しなくていいんだよ……」

「でも私のこと女性として意識してますよね？」

「それは……まあ。中身が子供じゃないから多少は」

「なら可能性はあるわけじゃないですか。その可能性を少しでも減らしたいならアリシアさんのことよろしくお願ひしますね」

「が、頑張ります……なんだかんだでリースさんはアリシアに甘いですよね」

「今はまあ私が保護者みたいなものなので、大人として当然の対応をしているだけですよ。だからおふたりが悪いことしたらちゃんと怒ります」

「……実に母親つて感じですね」

「む……その言葉は少し複雑です。私は保護者としては振る舞いますが母親になるつもりはありません。まだまだ女性として扱ってほしい年代ですし」

「何か……複雑というか面倒というか」

「ショウさん、女心というものは複雑で面倒なものなんです。それが分からないと良い交際は出来ませんよ」

「そう力強く断言されましても……俺は当分恋愛をするつもりはないんですけど。見た目も小学3年生になつてますし。

まあこれを言うとまた何か言われそ�だから言わないでおくけど。とりあえず……今日の内にジュエルシードの暴走が起きないことを祈りたい。今日の内にまたフェイト達に会うのと、少しでも時間が空いてから会うのとじゃ割と違つてきそうだし。

「ちなみに……私は今のショウさんを受け入れられますので優良物件ですよ」

「小学生を誘惑するのはやめてください」

「残念です……おねショタはある程度の需要があると思うのですが」

「……どこからそんな知識を仕入れてるんですか？ ああやつぱり答

えなくていいです

第8話 「懐かしき重み」

フェイト達と予想外のタイミングで出くわしたものの、あれからすぐには顔を合わせるようなことにはならなかつた。

ジュエルシードの関わる事件は起きているのだろうが、魔法戦が行われる規模のものは起きていない。前の世界では早い段階でなのはとフェイトがぶつかつたように思えたが、この世界ではまだ先のようである。

とはいえる……今日でもなのは達がぶかかる事件が起きててもおかしくはないんだよな。

そう分かつてはいても今日は休日。

平日ならば学校なので夕方近くまで学生としての義務で拘束されてしまうが、今日は自由だ。家の中で待機しているのもいいのだが……家には状況的に迂闊に外に出ることが出来ない子供が居る。

漫画とかを読んでる間は大人しいんだが……読むのがなくなるとすぐに絡んでくるからな。

まあリニスさんは買出しや掃除とかやつてるし、邪魔するわけにはいかないと分かつてているから俺に絡んでくるんだろうが。

色んな絡んでくるタイプとの経験はあるが、アリシアはそれとはまた少し違うから疲れるんだよな。あいつらの相手も疲れてたけど。

そういうこともあって俺は今図書館に来ている。

アリシアに絡まれないようにするため、というのは否定しないが、外に居た方が何かあつたときすぐに動けるのも理由だ。

「……単純に俺の気分転換でもあるが」

中身が中身だけに最近まで読んでいたのは機械に関するものが大半。アリシアに勧められて漫画を読んだりもするが、精神年齢の高さ故なのか本来の性なのか小説の類も読みたくなつてしまふ。また趣味を増やすために何か参考にしてみたいという気持ちもあつた。

俺は昔から機械弄りやお菓子作りを趣味としてやつていたわけだが、ここ最近それ以外にも趣味を作つてもいいと思つたのだ。

事が起きなければ自由な時間はそれなりにあるし、今後のことばか

り考えていても同じ流れで進んでいないのだから考え過ぎても気疲れしてしまう。何か没頭できるものを作るのは悪くない。

「まあ……」

それ以外にも理由はあるのだが。

それはこの世界のあいつ……八神はやてと顔を合わせることだ。細かな部分は変わつても大きな流れまでおそらく変わらない。そうなればこの世界のはやはては間違いなく闇の書事件に関わることになる。

前の世界では俺は事件が起きる前からはやはてと知り合いだつたが、この世界ではまだ繫がりがない。

闇の書事件での目的ははやはてを無事に生存させ、また少しでもあいつやあいつの騎士達から悲しみを減らすこと。

そのためには今の段階で多少なりとも繫がりを作つておく必要がある。繫がりがない状態で主のために動き出した騎士達と戦場で出会えば協力関係になることは不可能に等しいのだから。

「……気が進まない部分のあるんだが」

単純にこの世界のはやはてと友人になりたいという気持ちはある。

だが今やっていることは今後起きるであろう事件で立ち回りするために土台作り。打算で彼女に会おうとしているのは否定できないだけに心苦しい気持ちを捨てきれない。

まあ……そもそも前の世界のような関係になれるとは限らないんだが。

俺の知つているあいつらとこの世界のあいつらは違う。姿や声は同じでも同じ存在というわけじゃない。ここでは流れる時間が違うんだ。そうなれば体験することも違つてくる。だから本質は同じでも俺の知るあいつらとは間違いなく違う部分が出てくるだろう。

俺は自分の意思でこの世界に来ること選んだ。

そして……自分の良いようにあいつらの人生に影響を与えようとしている。それは結局善意であつても俺の自己的な考え方で偽善なのかもしれない。

なら俺は……この世界のあいつらと親しくなるべきじやないのか

もしれない。

親しくなればなるほど、きっと俺はこの世界のあいつらに前の世界のあいつらを重ねて見てしまう。想いが強まれば強まるほど、やろうとしていることを躊躇してしまうかもしれない。なら距離を保つて自分がやること決めたことを為す方がいいのではないか……。

「もう……ちよい」

運が良いのか悪いのか……何でこのタイミングで彼女を見つけてしまうのだろう。

視線の先に居るのは必死に手を伸ばして本を取ろうしている車イスの少女。短く切り揃えられた茶髪には髪飾りがあり……その姿は俺のよく知る昔の彼女と瓜二つだ。

ああ……この世界に来てようやく気付いた。

昔からあいつらは俺にとつて大切な人という枠の中に居ると思っていた。だが自分で思っていた以上にあいつらは俺にとつて大切な存在だつたんだ。だからこんなにも切なくて悲しくて……距離を保とうと思うことに葛藤を覚えるんだろう。

「あと少し……お、取れ——あ」

本が取れたことで気が緩んだのか、上体を必死に伸ばしていたはやはてはバランスを崩してしまった。それによつて車イスも傾いてしまい、このままでは彼女は床に打ち付けられてしまうだろう。

そう思つた俺は気が付けばはやての元に駆け寄つていた。大人の身体のままこの世界に來ていたならば、もしくは魔法を使える状況だつたならばはやてが投げ出されるよりも前に助けることが出来ただろう。だがフェイト達がすでにこの世界に來ている以上、下手に魔法を使えば今後支障が出る確率が高くなる。

そのため、俺は空中に投げ出されたはやてを助けることにした。

前の世界のはやてと視界に映るはやての体格に差はないようと思える。だが俺の体格も今はそのはやてと同じくらい。つまり……魔法を使つていない状態では華麗に助けるのは不可能と言える。昔の習慣で鍛えてはいるが、さすがに同年代を軽々と持ち上げるほど鍛えてはいない。世間からの目もあるし……

「ぐへつ……!? ……あれ？ 痛みはあるけど思つてたほどやあらへん」

「あのさ……そういう感想言えるなら先に礼を言うべきだと思うんだけど？」

普通ならば俺を下敷きにしている状態なのだからさつさと退けと言いたいところだ。だが相手は車イスに乗っている。そんな相手にさつさと退けと言えない。

ただ……この頃のはやての体重は何となく知つているが、それでも重いと思うのは俺の中の感覚がまだ大人のままだからなのか、それともこつちのはやての体重に問題があるのだろうか。まあそんなことよりも考えるべきことがあるんだけど。

何故ならはやてはこつちを見た状態で何度も瞬きしている。

つまりそれは現状を必死に理解しようとしているということだ。俺の知るはやてと根つこの部分が変わつてないなら意外と乙女な面というか、少女チックな部分もあるのでこのあと狼狽えそうである。「まさか男の子を押し倒す日が来るとは……私も大人になつたものやな」

前言撤回。このはやては俺の知つているはやてとは少し違うようだ。

俺の知るはやてでも初対面の頃は割とまともな反応をしていた。だが今日の前にいるはやては平然とこつちを顔を覗き込んだまま今 の言葉を発している。

もしかすると状況が理解出来てなくて独り言を言つただけかもしないが、少なくともこれだけは言えるだろう。この世界のはやても関わると面倒臭そうな一面がありそuddoと。

「車イスに乗つてたから退けとは言わないけど……少なくとも退こうとする意志は見せるべきじゃないの？」もしくは謝罪するとか」「そもそもうや。助けてくれてありがとう、そしてごめんなさい。ただ……今の流れやとそつちこそ大丈夫？」の一言くらいあつてもえんやない？」

「君がまともな反応してたならそう言つてたよ……ちよつと失礼」

「え、あつ、ちょつ!？」

はやての身体に片腕を回した俺は上半身ともう片方の腕を使つて上体を起こす。

何やらはやてが恥ずかしそうな声を上げたが、そこは我慢してもらいたい。こっちとしても起き上がるないことには何もできないのだから。

「あ、あんた……急に何するねん!? 女の子の身体に気安く触れたらダメって教わつとるやろ!」

「先に一言断りは入れただろ。まあ触れたことは謝るけど……ごめん」

素直に謝るとはやては顔を赤くしたまま「によ」と何か言い始めた。表情や雰囲気から察するに恥ずかしそうではあるが、こちらへの怒りは収まつたように思える。

さつきは少し違うとも思つたが、そこまで変わらないかもな。

むしろ……俺の知るはやてよりもまともかもしね。まあ八神はやてという人間は自分のペースでなら何でもできるけど、予想外のことになると打たれ弱いイメージがあるのでそれだけのことかもしれないが。

そんなことを考えながら俺は倒れていた車イスを起こす。誰かが駆け付けるかとも思つたが、他の場所でも本を大量に落とす人でも居たのか人が来る気配はない。

「えつと……何で私に近づいてくるんかな?」

「乗せるのを手伝うからだけど?」

おそらく目の前に居るはやても俺の知る彼女と同様に大抵のことは自分ひとりで出来るのだろう。故に手伝おうとしても断るだろう。

とはいえ、もしも人が来たしまうと俺は足の不自由な少女を助けようともしない奴に見えるはずだ。俺にかつての世界の記憶がなければ、そう見られても構わないと思つたかもしれない。

だが現実は、身体に引っ張られている部分はあるとはい精神は大人。子供が困つているのに助けないという選択はしたくない。

「ちよつ、だから気安く女の子に触れるんは……！」

「はいはい、それは分かつてから今はちゃんとつかまってくれ」

そうじやないと余計に重い。

昔の俺だったなら確実そう言つていただろう。そして、きっとはやてにそんなことを女の子に言つたらダメだと叱られたはずだ。

でも今の俺は違う。

そんな風に言おうとした。だけど言えなかつた。

だつて今感じている重みは、この子とは違うあの子のことを思い出るものだつたから。仮に事件が始まる少し前ではなく、数年前からこの世界に来ていたなら反射的に涙を流していたかも知れない。それほどまでに今の俺には懐かしくも切ない重みだつたのだ。

「そ、その……ずいぶん慣れてるんやな」

「何が？」

「何がつて……普通の子は車イスとか乗つてないやろ」

そう言うはやての口調は素つ気ない。

同年代の男子に慣れていないように思えるので照れ隠しかもしれないが、純粹に普通とは違う自分に負い目などを感じているからのかもしれない。

世界の辿る大きな流れは変わらない。

ならばこのはやても闇の……壊れてしまつた夜天の書の影響で後天的に車イス生活を始めたのだろう。そこは変わらないと推測できる。

だが俺の知るはやては人前では決して弱い自分を見せようとはしない子だつた。でも目の前に居るはやては俺の知るはやてではない。その証拠に……今見えているはやての顔は、見覚えがあるようになってどこか違つて見える。

「誰だつて怪我したり、病気になれば車イスを使う。俺からすれば君は普通の女の子だよ」

車イスにはやてを乗せながら思つてることは素直に口にすると、はやての顔に再び赤みが差した。

その姿は俺の記憶に残るすっかり大人になつてしまつた彼女とは違い、素直に可愛いと思える。彼女にもこのような時期があつたよう

に思えるが、どうしてあのようく育つてしまつたのか。

まあ……人の性格は環境に作用されるわけだが。

故にこの子も俺の知る彼女のようになる可能性はある。だがこの可愛さを残したまま大人になる可能性もある。それは誰にも分からぬ。

そもそも、その結果を知るためには長い時間が必要になる。その中でも大きな出来事が間近にふたつもある状況なのだからまずは目先のこと集中しなければ。ただ……これだけは言つておきたい。

「クラスにひとりくらい居そうな女の子だよ」

「ひとつええか？ 何でちゃんとまとまつてたんに言い直したん？ 私の感覚が間違つてないならさつきとは別の意味が込められてそんなんやけど」

だつて普通という言葉が一般的という意味で使われてるなら、君の言動を考えると少しずれてるようと思えるから。普通の人は初対面の人間に乗つた状態でボケたりしないでしょ。

そのように言いたくもあつたが無言を貫くことにした。

今日の目的はこの世界のはやてと面識を持つこと。嫌われるのも困るが親しくなりすぎるのも困る。

親しくなつていた方が後々楽なことも出てくるかもしれない。が、現状でもこの世界には俺の知らない流れが存在している。先日のフェイトの一件が良い証拠だ。

それだけに……下手に関わり過ぎると彼女の身に俺の知らない不幸が降りかかるかも知れない。

ただでさえ、ジュエルシードを巡る事件が終われば、彼女を中心にして事件が起きるのだ。避けられない不幸があるので余計な不幸が降りかかるないようにしなければ。

「まあ……ええけど。……そいいえば、名前何て言うんや？」

「普通名前を聞くなら先に名乗らない？」

「それはそうやな。私は八神はやて言います。えつと、その……素直に言うのが少し癪な部分もあるけど、助けてありがとう。でもあんま

り女の子に触れたらあかん。私みたいに心が広くないとすぐ痴漢やセクハラやつて騒がれるんやから」

素直に礼だけで終わらないあたりが実に八神はやてらしい。これを聞いて理解できるのは、俺と同じような境遇の人間が全てを観察出来ている存在くらいだろうが。

「次はそつちの番や」

「たまたま図書館で顔を合わせた相手の名前なんて知らなくてもいいと思うんだけど」

「自分を助けてくれた相手の名前くらいは知りたいと思つてもええやろ。私は恩を仇で返すような真似は嫌いなんや。それに……また顔を合わせるかもしれんやろ？」

それは聞く人によつて解釈が異なる問いかけだ。
普通にまた会うかもしれないと聞いている。そう判断する者も居るだろう。

だが八神はやてという人間の本質……歩む流れを知つてゐるものならば、また会いたいと言つてゐるようにも思えるのだ。

守護騎士が目覚めるまでこの子はひとりなのだから。

「まあいいけど。俺は夜月翔」

「ショウくんか。頻繁に顔を合わせるか分からんけど、とりあえずよろしく」

にこりと笑いながら手を差し出すはやてに俺は少し戸惑つてしまふ。

知つている者は知つてゐると思うが、俺は最初から下の名前で呼ぶタイプではない。相手が下の名前で呼ぶことを望むならばそうするが、基本的には苗字で呼ぶ。すっかり精神も大人になつてゐるだけにその傾向が強い。

故に子供の素直さに思うところがあつたのだ。まあ……笑みを浮かべている彼女に対しても色々と沸き上がる想いもあつたのだが。

とはいへ、ここで手を払い除ける理由もない。

なので俺ははやての手を握り返しながら返事をした。手を握る際に一瞬彼女の手が動いた気がするが、気にすることではないだろう。

この頃はまだ初心な面が表に出やすいのだから。

「じゃあ俺は本を探しに行くから。取りにくい本は素直に人に取つてもらえないなよ」

「さすがに何度も転んだら周りの人にも迷惑やしな。そのときはそうする。ええ本が見つかることを祈つとるで。私がおすすめなのを紹介してもええけど」

「それはまた今度にするよ。どんな本があるのか一通り見ときたいし」

それを最後に俺はこの場から歩き出す。

はやってからすればもう少し話したかったかもしれないが、何も起きなければしばらくは図書館の中に居るのだ。また顔を合わせるかもしない。なら一度に話す必要もないだろう。

先のことまで考えれば、これから何度顔を合わせることになるか分からぬのだから。

第9話 「接触・忠告」

この世界のはやてと出会つて数日後。今日も何事もなく終わるのだろうかと思つてゐる内に放課後を迎えた。

いつ状況が動くのか。もしかしてこの世界ではフェイト側の状況が異なり、ジユエルシードを巡つて戦うような事態にはならないのか。

そんなことをふと考へてしまふくらい何とも言い難い緊張感が常にあるだけに精神的な疲れは日々蓄積されていく。

真つ直ぐ家に帰つてお菓子でも作るか。それとも図書館にでも寄つてはやてが居るか確認してみるか……。

少しでも気分が変わりそうなことを考へていると、車に乗ろうとしているアリサとすずか、そのふたりを見送ろうとしているなのはの姿が見えた。お嬢様達は習い事があつたりするだけに特別珍しい光景ではない。

俺の記憶が正しければ、前回はこ^ういう時にジユエルシードの発動してなのはがフェイトと遭遇した気がする。

だが何度も似た光景をすでに見ているだけに、これがきつかけといふわけではないようだ。なので緊張感が高まつたりしない。

「じゃああたしとすずかは今日お稽古の日だから」

「行つてきます」

「うん、お稽古頑張つて」

今日も仲睦まじい3人である。

俺の知つてゐるような事態になれば、一時的に亀裂が入つてしまいそうだが、この世界の3人も俺の知る3人のように自力で関係を修復できるとは思う。そう素直に思えるほど、この3人の信頼は厚い。

意識を3の方に向けていたせいか、ふとすずかと視線が重なる。

一見すずかはおつとりというか穏やかな性格の子に思えるが、運動神経は抜群に良く、また人よりも気配に敏感な節がある。それは前の世界でもこの世界でも変わらない。

まあ……目が合つたところで深い意味はないだけにこのまま帰る

だけなんだが。あっちとしても呼び止めてまで別れの挨拶をしようとは思わないだろうし。

「すずか、あんたどこ見て……ははくん」

「ア、アリサちゃん、何でそんな反応するのかな!? ベ、別にそういうんじゃないから。たまたま姿が見えて目が合っただけで」

「別にあたしは何も言つてないんだけど。というか、たまたま姿が見えたから目が合うつて……あんた達つて」

「違うから! 本当にたまたまで。もう意地悪しないでよ!」

視線を外した直後に騒ぎ始めたが……もしかして俺のせいなのだろうか。

アリサは面倒見が良いがいたずら好きというか人をからかう一面もあるし。主にその被害に遭うのはなのはやすずかなわけだが。

今回のそのパターンだろうか。

アリサやすずかとは、席や趣味的になのはよりも話す機会が多い。それだけに俺のせいですずかがからかわれている可能性もあるだけで。

中身が肉体年齢に等しいならこんなこと考えなかつたのだろうが……そこは言つたところで変わらない。つまり考えるだけ無駄なことだ。

仕方がない。もしも仮に俺のせいですずかがからかわれているのならば、今度お菓子でも差し入れしよう。たまには作る相手を変えたくもあるし。

というか……アリシアは今自由に動けないからあまり食べさせてると太りそうだからな。

こんなに美味しいとつい食べ過ぎる。太つたらショウのせいだからね! とか文句言いながらよく食べてるし。じゃあ作らないつてなると何で作らないんだつて怒る。

女心は変わりやすいって言うけど、あいつの場合は単純に食い気が強いだけだろうな。

「えつと……すずかちゃん、夜月くんと何かあつたの?」
「何もないし大丈夫だから」

「何ならなのはに呼んできてもらえれば？ 少しは話す時間はあるわけだし。どうせあいつも暇でしようから」

「アリサちゃん！」

「分かった、分かったわよ。これ以上は言わないから……それじゃなのは、また明日」

「なのはちゃん、また明日ね」

「うん、また明日」

お嬢様達を乗せた車が発進し、俺の近くを通つて行く。

窓越しに俺に向かつて手を振るふたりが見えたので、とりあえず軽く手を振つておいた。無視をすると後日アリサが絡んできそうだし、すずかがあれこれ考える可能性もあつたからだ。

これが理由で別の案件が発生することも考えられるが、それは仕方がないと割り切る。人の心なんてものは他人がどうこう出来るものではないのだから。

「夜月くくん！」

おつと……何やら全力全開で走つて來たぞ。俺、何か話しかけられるようなことをしただろうか。

まだ魔導師だつてことは知られてない。それに関係性もクラスメイトくらいのもの。それらから推測すると深読みするだけ無駄な理由で話しかけられるのだろうが、あれこれ考えてしまうのは中身が大人であるが故だろうか。

「何？」

「途中まで一緒に帰ろう」
え、嫌なんだけど。

なんて反射的に言いそうになつてしまつた。別になのはのことが嫌いなわけではないし、昔のように他人と関わりを持つのが怖いといふわけでもない。単純にふたりで居るところを見られると周囲から何か言われそだから嫌なのだ。

前の世界でならこの頃の俺は周囲とそこまで親しくしてなかつたから嫉妬とかもされてなかつたけど、今は別に普通だしな。成績だけで見ればむしろクラスでも上位だし。

でもこれは普段の訓練の賜物というか、大人が小学生の問題を理解出来ない方がおかしいわけで。

まあ何が言いたいのかっていうと、今の俺は特別目立つ存在じゃないがそれなりに周囲から認められている。故になのは達のような可愛い女子と一緒に居たりすると嫉妬されるわけだ。

「まあ……別にいいけど」

「少し嫌そうに見えるのは私の気のせいかな？」

「気のせいかもしれないし、気のせいじゃないかもしない」

「そこははつきり否定しようよ！」

はつきり否定しても疑いの眼差しを向けてきそうなのですが。

そう考えてしまうのは前の世界でのやりとりに問題があるのだろうか。話すようになつた頃はまだしも、どうにも俺は高町なのはいう人間と一部相性が悪かつたように思える。

その証拠に意地悪だとよく言われていたし。こちらからすれば、全てを意地悪で言つていたわけではないのだが。確かに意地悪で言ったこともあるが、割と相手側の被害妄想がひどかつただけで。

「何ていうか……夜月くんつて私に対してアリサちゃん達より素っ気ないというか意地悪じゃないかな？」

異なる世界で異なる流れが存在しているとしても、根っこが同じならば発する言葉に同じなのかもしれない。

「……意地悪ね」

「え、いや、別に本気で言つてるわけじゃなくて！　ただアリサちゃんとはこう本音で言い合つてるなつて感じがするし、すずかちちゃんと話す時は何というか優しい感じがするから。それを比べると私はどちらでもないと言いますか、扱いが雑なように思えるわけでして……！」

慌てているせいがどんどん敬語になつていてるのですが。

まあ俺のよく知るなのはにも似たようなところはあつたし、世界は違えど同じような存在なのだから似た言動をするのはおかしくないのだろうが。ただ……俺の心がざわつくだけで。このざわつきが時間と共になくなることを祈りたい。この子はこの子、彼女は彼女の

だから。

「まあ別に一緒に帰つてもいいけど」

「え……本当？」

「そこで疑つてくるからあれこれ言いたくなるんだけど？」「ううん、何でもない！ 一緒に帰ろう」

そうして一緒に歩き始めたわけだが、この時期に誰かとふたりで下校というのはあまり経験がないだけに少し新鮮に思える。中学時代だつたならホームステイしていた彼女と一緒に帰ることも多かつたが。

冷静に考えてみると、なのはと一緒に帰るのはレアケースなのではなかろうか。前はフェイトやはやても一緒に集団での行動の方が多かつたし。

この世界ではこういう日が増えるのだろうか。

「……ッ?!」

そんな他愛もないが平和な出来事を考えた矢先、何かが発動した気配を感じた。

この気配はほぼ間違なくジュエルシードのもの。気配のする方角を考えると、今日のジュエルシードは翼の生えた黒い虎の一件かもしれない。

この予想が正しければ、なのはとフェイトが遭遇を果たす可能性が高い。

「あ……！」

なのはも気配を感じたようで、立ち止まつて振り返った。

「えっと、あの、夜月くんごめん！ ちょっと急用思い出したから先に帰るね！」

「ああ」

「また学校で！」

そういう切るとなのはは全力疾走でジュエルシードの気配がする方角へ向かって行く。

なのははあまり運動神経が良い方ではない印象ではあるが、こういうときの動きは実に俊敏だ。まあ大人になれば近接戦闘もある程度

こなせていただけに根つこの部分は悪くないのだろう。この時期はまだそつちを訓練していないから鈍いところがあるだけで。

『マイマスター、このあとどうなさいますか？』

『ジュエルシードの方に向かつてる魔力反応は？』

『高町なのは以外に複数確認できます。ひとつはユーノ・スクライア、他は……』

『それ以上は言わなくていい……』

状況からしてなのはの後を追いかける他にないだろう。

だが……フェイト達と顔を合わせるのは一種の賭けだ。前の世界とは異なり、この世界では一度顔を合わせてしまっている。それ故に今日顔を合わせれば確実に敵として認定されるだろう。

そうなれば俺の知る流れとは異なる状況になる可能性も高くなる。

しかし、ジュエルシード事件で俺が達成すべきことはプレシアを生存させること。それにはなのは側、つまり管理局側で動くことになる。遅かれ早かれ敵の立場になるのだ。なら覚悟を決めるしかない。

「……レイ、行くぞ」



ジュエルシードの反応があつた地点に到着すると、ジュエルシードの影響で変異した黒い獣が子猫達に飛び掛かるところだつた。

私は子猫の前に出て防御魔法を展開し、襲い掛かつってきた黒獣を受け止め、右手に持っていたデバイスにを掛ける。

「バルディッシュ……！」

起動した相棒を振りかざしながら魔力を集める。

保持している魔力変換資質によつて集束していた魔力は電気へと変わり、バルディッシュを振り下ろすのと同時に雷撃として放たれる。

雷撃が直撃した黒獣は後方へと吹き飛ぶ。その隙に私はバルディッシュを掲げ、魔導師の戦闘服であるバリアジャケットを展開。「グオオオオ……！」

こちらを敵として認識した黒獣が突進していく。

おそらくこの世界の原生生物がジュエルシードに触れて暴走して

いるだけ。あまり傷つけたくない。可能な限り魔法の威力は抑えないと……

「……バルディッシュ」

相棒の名前を呼びながらデバイスの先端を黒獣に向けると、雷撃と化した魔力弾が放たれる。

しかし、ジュエルシードによつて身体だけではなく身体能力も強化されているらしく簡単には命中しない。

「なら……」

速射性を高めて連続で放つ。

最初の数発は回避されるが追つて放たれた魔力弾は見事に命中。雷撃を柱を立てながら周囲に砂塵を巻き上げた。

最初の雷撃にも直撃したし、今のもまとも当たつた。魔力を用いた防御を張つているようにも思えない。

雷撃への耐性が高いのか、それとも私が手加減をしているだけなのか。どちらにせよ、この後の動き次第で行動を変えなければならない。

バルディッシュの先端を砂塵の方に向けながら観察していると、一直線に黒獣が向かってきた。

しかし、黒獣は途中で空へと向かつて跳躍。漆黒の翼を生やして逃亡を始めた。獣のとしての本能が私には勝てないと悟つたのかもしれない。

「でも……」

私の目的はジュエルシードを手に入れること。出来るなら誰かを傷つけるような真似はしたくないけど、必要とあれば容赦はしない。

高速移動魔法を用いて逃亡する黒獣の背後へ回り、黒獣の左翼にかけてバルディッシュを一閃。紫色の鮮血が舞い散り、バランスを崩した黒獣は回転しながら高度を下げていく。

だが再生能力が高いらしく、失った左翼を復活させて体勢を立て直したようだ。

一度着地した私は追撃しようとした瞬間、背後に落ちた切断した左翼が目のない蛇のように変異し襲い掛かってきた。

冷静に前方に飛びながら回避し、体勢を立て直す。バルデイツシユを構えながら雷撃を放ち、異形の生物を粉碎した。

「グオオオオオオ！」

自分から意識が逸れていたことを好機と思ったのか、黒獣がこちらへ向かって勢い良く降下してくる。

あの獣の再生能力からしてさつきみたいに加減してたら埒が明かない。それにあまり長引かせるのも良いとは言えない。ここは一気に仕留めよう……

「……ッ」

「でえええい！」

気合の声と共に桃色の光が黒獣へと飛来し、一気に地面へと叩き落とした。

今のは……魔力反応があることからしても私以外の魔導師があそこに居る。ジュエルシードを狙っているのかまでは分からなけれど、あの魔導師が何かする前に黒獣のジュエルシードを回収しないと。

空へと上がって移動していると、下半身が骨のようになつた黒獣が空へと昇ってきた。先ほどの一撃が効いているのか再生する様子はない。

バルデイツシユをサイズフォームへと切り替えながら接近し、魔力を高めながら一気に振り下ろす。

「ジュエルシード……封印！」

雷鳴に等しい一撃によつて黒獣は爆ぜる。

これでジュエルシードは問題ない。そこに居る魔導師がどう出るか……

「……っ」

視界に映つたのは白いバリアジャケットを纏つた少女だった。

見たところ私とあまり年代は変わらず、こちらに敵意があるようには思えない。あちらももうひとりの魔導師が子供だつたことに戸惑つてているだけなのかもしれないが。

いや、そんなことはどうでもいい。長居は無用、早くジュエルシードを回収して戻らないと……

「あ……あの、待つて！」

少女は私がジユエルシードに近づくと慌てて声を掛けってきた。

どうやらこの子の狙いもジユエルシードのようだ。どういう理由なのかは不明だが、それでもこれだけは言える。ジユエルシードを奪おうとするなら私の敵だ。

とはいえ、可能なならば荒事に発展させたくはない。必要のない戦闘を行つて負傷すれば今後の活動に響くのだから。

そのため私は威嚇かつ牽制でバルディッシュュを向けながら魔力弾を生成した。

それに少女は一瞬怯んだ様子を見せたが、飛行魔法を発動させて私の傍まで高度を上げてくる。

「あの……あなたもそれ、ジユエルシードを探してるのは？」

「それ以上近づかないで」

「いや、あの……お話ししたいだけなの。あなたも魔法使いなの？」とか、何でジユエルシードを？ とか……」

魔導師になつて日が浅そうな雰囲気だ。

でも……だからといつて慣れ合う理由にはならない。この子もおそらくジユエルシードを集めてる。この周辺に被害が出ないようにするため。そんな善意でやつているのかも知れないうけど……。

忠告を無視して近づいてきた少女に向かつて魔力弾を連続で放つ。彼女は慌てて回避するが、実戦経験は少ないのでだろう。あつさりと背後を取ることが出来た。

バルディッシュュを再度サイズフォームに切り替えながら少女へと斬りかかる。

「つ……!?」

紙一重のところで回避され、斬れたのはバリアジャケットの一部だけ。

今後関わろうと思わないように多少痛い目に遭つてもらう。

上空へと逃げた少女を追つて移動し、最上段からバルディッシュュを振り下ろす。だがそれはデバイスによつて防がれた。簡単にやられるつもりはないと言いたいのか、少女の目には明確な意思のようにも

のが感じられる。

「ま、待つて！ 私、戦うつもりなんてない！」

「だつたら……私とジュエルシードに関わらないで」

「だから……そのジュエルシードはユーノくんが！」

敵の事情なんて聞く理由はない！

半ば強引に少女を吹き飛ばし、バルディッシュを身体の後ろまで引きながら構える。一際魔力を込めながら大きく振り抜くと、サイズフォームの先端に発生していた光刃が回転しながら少女へと飛んでいく。

魔力斬撃用の圧縮魔力の光刃を発射する魔法『アークセイバー』。

少女は防御魔法を展開するがそれはこの魔法には悪手だ。

この魔法は弾速は速くはないが、バリアを噛む性質があり、軌道も変則的なので攻撃される側にとつては防御・回避しにくい。加えて「セイバー・エクスプロード」というトリガーコードによつて光刃を爆破できる。

よつてバリアに噛んだ瞬間に爆破されば敵に有効打を与えることが可能だ。

光刃の爆破によつて負傷した少女は地面へと落ちていく。格の違いはこの1戦で感じてはくれただろうが、今後関わらせないためにも明確な経験が必要だ。

だから私は……落下する少女に向けて雷撃を纏つた魔力弾を撃ち込むことにした。

「……ごめんね」

放たれた魔力弾は見事に命中し、勢い良く地面に叩きつけられる……はずだった。

少女が地面にぶつかる瞬間、黒い風が駆け抜け彼女を受け止めた。現れたのは黒いコートを纏つた黒髪の少年。その少年の顔に私は見えがあつた。

「君は……」

先日街中で顔を合わせた少年だ。それほど会話をしたわけではないが、アルフが絡んでしまつただけによく覚えている。

「夜……夜月くん？」

「悪い……もう少し早く来るべきだつた」

「な、何で夜月くんが……」

「そのへんはあとで話す……今はあつちだ」

少年の目がこちらを向く。

敵意のようなものは感じない。ただ何かしらの感情はあるように思える。

見たところあの少女とは知り合いのようだ。なら傷つけた相手……それが先日顔を合わせた人間なら何か思うところがあるのはおかしいことじやない。

問題になるのは……彼が少女と知り合いであるということ。それは必然的に私にとつて敵ということを意味する。

あの落ち着き用……多分あの子と違つて魔法に慣れてる。
少女と知り合いということはこの街に住んでいる可能性がある。
なら普通なら魔法に慣れているのはおかしい。この世界は魔法文化のない管理外世界なのだから。

でも稀に管理外世界の人間が魔法世界を訪れることがある。

なら逆に魔法世界から管理外世界に移り住んだ人間が居てもおかしくはない。彼の家がそういう家系なら魔法に関する知識を有しているのも納得がいく。故に……彼は現状私にとつて最大の敵だ。

「……あなたもジュエルシードを狙つてるの？」

「否定の返事をしたら君は信じてくれるのか？」

答えはノーだ。

私は彼と少ししか話したことがない。言葉を鵜呑みに出来るような信頼関係があるはずがない。

だけど……彼が嘘を言つているようにも思えない。彼の目は痛いほど真っ直ぐ私を見据えていて……それでいてどこか寂しく悲しげだ。

どうしてあんな目で私を見るのか。

そんなことを考え始めた矢先、少年が少し動いた。足を半歩前に出す。ただそれくらいのことだつたが、私は反射的に魔力弾を放つてしま

まう。

彼の傍には先ほど被弾した少女も居るだけに思わず声を漏らしそうになる。だが……

「ツ……！」

黒い閃光が走つたかと思うと、私の放つた魔力弾は跡形もなく消えた。

魔力を破壊……いや斬り裂いたのは少年だ。彼の右手には煌くようく輝いている長剣が握られている。

おそらくあの剣はデバイスだろうが、子供が使うにはある大振りだ。

しかも魔力刃ではなくそのままの使用を想定して作られているのか、装甲もバルディツシユに比べると厚いように見える。

普通ならまともに触れなさそうだけど……あの子は軽々と扱つてみせた。

それも眉ひとつ動かすことなく冷静に。今だけ戦闘力を計ることは出来ないが、少なくとも先ほどの少女よりも格段に上だ。もしかすると私よりも……

「それが君の答えか？ 現状俺は君に手出しするつもりはないんだが」

その言葉のとおり、少年がその場から動く様子はない。

少女のことを考えての行動かもしれないが、これ以上この場に留まる理由がない私からすれば何にせよありがたいことだ。

バルディツシユにジュエルシードを収納した私は、最後に少年に向けて告げる。

「…………私とジュエルシードには関わらないで。もしもこれ以上関わろうとするなら……次は容赦しない」

第10話 「特訓と微々たる変化」

早朝。

俺は人気のない周囲を木々で囲まれた空き地を訪れていた。この世界を訪れてから前からの習慣であるランニングなどは行っていたが、この場所はそのコースから外れている。だがトレーニングには代わりない。

トレーニングするのが俺ではなく、もうじき来るであろう少女というだけだ。

「ショウくくん！」

朝からそんな大きな声を出さなくとも。そう思いながら声の方へ視線を向けると、すぐ傍まで駆けてきていた。

学校の体育では鈍いところがあるのに、何か決めた時の行動は何故ここまで加速させるのだろう。まあ血筋的に運動神経は悪いないのは知っているんだが。

「おはよう、今日から宜しくお願ひします！」

なのはは礼儀正しく頭を下げる。

何故こうなつているかと、先日のフェイトとの戦闘が理由だ。

あのときなのはは何も出来なかつた。その他にも思うところがあるのか、俺やユーノに魔法の使い方を教えて欲しいと頼んできたのだ。

正直ユーノだけに教われば十分だとは思うのだが、俺がこの世界のユーノと接触したのはその日が初めて。なのにユーノだけで良いなんて言うのは違和感を与えるだけだろう。故に俺も協力することにしたのだ。

「ああ……スクライア、どこまで教えた？」

「えっと、リンカーコアのこととか魔力運用については教えたよ」「そうか。なら基礎的なところは君が教えてくれ。俺はレイジングハートと一緒に実戦向こうことを教える」

といつても射撃や砲撃を教えるわけじゃない。

ここで正しいというか一般的な教え方をすれば、俺の知るなのはのように偏ったスタイルにはならないだろう。

だがあのスタイルこそがなのはに最も合っているのは間違いない。この世界のなのはも初めてジュエルシードを封印する際に砲撃を行つていたのだから。

ちなみに元々知つてはいるが、なのは達がジュエルシードを集めている理由はすでに聞いている。

この世界にロストロギアが散らばつてているということから管理局に連絡を入れることは出来る。だが今すぐ管理局が来たところでフェイト達を管理局が追うことはしないだろう。

何故ならなのはとぶつかつたとはいえ、やつていることはロストロギアの回収。何かしらに使用してはいない。善意から回収していたと言えばそれまで。なのはとぶつかつたことも言い訳出来る範囲だ。とはいえ、魔法世界に関わる身として管理局に対し何もしないのは悪手に近い。

そのため、ロストロギアらしきものが存在しているかもしれないという曖昧な感じで伝えておいた。

危険性がはつきりはしていないので迅速な動きはないだろうが、少なくともこの世界に局員を向かわせはするだろう。

「高町」

「なのは」

「……高町」

「な・の・は」

なのはは、俺とふたりで自分の名前を言いたいのではない。

お願ひ！ みたいな目でこつちを見ているあたり、俺に下の名前で呼べと言いたいのだろう。

まあ俺の名前を下で呼び始めたからそろそろだとは思つていたよ。ただ俺としては、名前を呼ばなくとも友達になれると言いたい。

「さつきから何が言いたい？」

「そろそろ私のことなのはつて呼んでくれてもいいと思うの」

「……理由は？」

「それはほら、私とショウくん同じクラスだし。これから一緒にジユエルシードも集める仲間だもん」

「僕も出来たらユーノって呼んで欲しいな。スクライアは部族名だし」

お前らはどんだけ他人との距離感をグイグイ詰めたいんだ。

世の中には色んな人間が居るんだぞ。もう少し他人の距離の詰め方も考えてくれないものか。

そのへんのことを置いておくにしても、なのはの方には他にも問題があるんだよな。本人は自覚してないだろうけど、知らないことは罪とよく言つたものだ。

「はあ……まあユーノは良いとして高町は善処するつてことで」「え、何でユーノくんは良くて私はダメなの!? 私のことも名前で呼んでよ!」

「あのな高町、俺は男子で君は女子なんだ」

「それはそうだけど……それが何か関係あるの?」

この鈍感小学生が。

何故アリサやすずかといった年齢以上に精神年齢が高い友人と一緒に居るのにお前はそうなんだ。ユーノは俺の言いたいことを分かつてそうな顔をしているぞ。

「それが分からぬから君はバニングス達にまだ早いとか言われるんだ」

「そうなの? ジヤあ教えてよ。教えてくれないと分からないし」

「却下」

「ありが……何で!?

何でつて……今言つたところで頭の上に疑問符が並ぶだけだから。それに

「俺は君が魔法の練習をしたいって言うから付き合つてるんだ。世間話するのが目的なら帰るぞ」

「それはただけど! でも……少しくらいお話ししてくれても。ショウくんの意地悪……」

「意地悪で結構。それよりさつさと始めるぞ。この前会った金髪の子……彼女は相当の腕だ。多少の努力でどうにかなる相手じゃない」フェイトの存在を出すと、なのはの目の色が変わる。

常識的に考えれば最悪の出会い方をしたというのに。まあここでこういう目が出来るのが、高町なのはという存在なのかもしない。それが理由で無理や無茶を繰り返しかねないのが問題ではあるのだが。

「ショウくん、私はどうすれば強くなれるかな」

「私達な」

「え？」

「君の持つレイジングハートはインテリジエントデバイス……簡単に言えば、所有者をサポートするAIを積んだデバイスだ。だから君とレイジングハート、ふたりで強くなるんだ」

「……うん！」

実に良い返事だ。レイジングハートの方も物としてではなく、なのはの相棒として扱われたのが嬉しかったのか瞬いている。ふたりともやる気は十分なようだ。

ただなのはは時として自分への負荷を気にしない。レイジングハートもマスターが望むならそれに応える性格だ。

それ考えると色々と思うところはある。

が、下手に戦い方を変えるのも今後の戦いでなのはの危険性を高めてしまう可能性が高い。あれこれ言いたくもなるが、俺の知る彼女よりも無理や無茶をしないように導いていくしかないだろう。

「さて、これからやっていくトレーニング方法だが」

「ショウくんと戦うの？」

何故真っ先にそれが出てくる?

どの世界においても高町なのはという存在の根幹が酷似しているのならば、確かに好戦的な一面があつてもおかしくはない。

フェイトや彼女のライバルである騎士の方がそういう一面は強くはあるのだが、彼女達が身近な存在になるのはまだ先の話だ。今はなのはのことだけに集中しよう。

「それはやるにしても当分先だ。高町、君は戦闘において何が重要だと思う？」

「えつと……パワーとかスピード？」

「そうだな。確かにそれらはある方が良い。だがそれ以上に大切なことがある」

「大切……負けないって気持ちとか！」

高町なのはという存在は、不屈という言葉を信条としていそうなどころがある。

それはこの世界でもあちらの世界でも変わらない。比較してもいけないと思うが、高町もなのはも根幹はブレない『高町なのは』という人間。変わっていること変わることがある中、変わらないこともあるのだと実感できる言葉だつただけに思わず笑いがこぼれた。

「わ、笑うことじやん！」

「別にバカにしたわけじゃない。君らしい答えだと思つただけだ」

「そ……そういう言わるとそれはそれで何ていうか恥ずかしいかも。それで答えは何なの？ 今の方からして別のが答えなんだよね？」

それが理解出来るなら普段あんたにはまだ早いとか言われることも理解できそうなものだが。

身近にその手のことを学べる存在は居るはずだし。この世界でも恭弥さんと忍さんはお熱い関係で、土郎さんや桃子さんも未だに新婚みたいな雰囲気出しているんだから。

まあ今は関係ないので口には出さないでおこう。ただでさえ、高町なのはという存在と俺はどこか噛み合わないところがある。それを抜いても今後の展開が読めないだけに少しでもなのはを鍛えておくべきだ。

「ああ。答えは知性と戦術だ」

「知性と戦術……」

「例を挙げるなら飛行や射撃、空中機動の基礎や応用さ。今までは何気なくやつてたかもしれないが、そのへんをきちんと理解してるのでしてないのでは明確に違いが出てくる」

「なるほど……ショウくんつて物知りなんだね」

そりやあ魔導師歴は10年以上ありますからね。別世界のあなたとは一緒に教導もしてましたし。

まあ今の俺では口が裂けても言えませんが。だつて今の俺は小学3年生。魔法を使い始めて10年以上経つてるなんてどう考へても計算が合わない。

「少なくとも君よりはな。さて時間も惜しいから今は始めるとしう。レイジングハート、今言つたようなことを高町に教えて欲しいだが異論はあるか？」

『いえ、特に異論はありません』

「なら都合が良い時にイメージトレーニングで教えておいてくれ」
『了解しました』

なのはの特訓に関わるのはこれくらいで良いだろう。

きちんと関わった方がまともな魔導師に育つんだろうが、フェイトと戦うことを考へると中途半端に綺麗にまとめるより一点特化にした方が勝機がある。

それに……あの集束砲撃とかを生み出してもらわなければ今後に響くだろうからな。俺が教えられなくもないが、トラウマを植え付けかねない魔法を教えた人物と称されるようになると思う何か嫌だ。出来れば自分で生み出してほしい。

「よし……そういうわけで解散」

「ありがとうございました……つて、ちょっと待つて！」

「ん？」

「まだ何か？　みたいな顔はおかしくないかな。私まだショウくんから何も教わってないんだけど!?」

「基本的なことはユーノが教えてくれるだろうし、戦闘の基礎はレイジングハートが固めてくれる。まずはそれをしつかりやれ。その成果を見て足りないところがあれば俺が教えるし、分からぬこととか疑問がば質問しに来ればいい」

少々不満そうな顔をしているが、食つて掛かつて来ないあたり一応納得はしたのだろう。

やれやれ、関わり方を考えるのも大変だ。

高町なのはという人間は、感覚で魔法を組める天才肌。時が進んで教導官になる頃には理詰めで組むようになつていてるだろうが、この頃の彼女には魔法の知識が足りなすぎる。そこに理詰めで魔法を組む俺が関わり過ぎると持ち味を殺しかねない。

「というわけで俺は帰る。ただ最後に言つておくが、くれぐれも無理や無茶なトレーニングはするなよ。平日は学校もあるんだから」



高町なのは育成計画。

そう呼べるほど大それたものではないが、この世界のなのはが特訓を始めてそれなりに時間が経つた。

早朝はユーノとトレーニング、学校ではレイジングハートからイメージトレーニングを受けているだけに順調に成長している。それが俺にも分かるのは、毎日のように疑問に思ったことなどを質問しに来ているからだ。

放課後はアリサ達の誘いを蹴つてジュエルシードを探している。

1日のスケジュールを考えると小学生には酷な生活にも思えるが、ウトウトしたりはしていないので睡眠はきちんと取っているのだろう。

俺の忠告が効いたのならば、ぜひ今後もその調子で続けてもらいたいものだ。

「……さて」

今日も学校が終わった。これからジュエルシードの搜索が始まる。

管理局に連絡を入れた割に到着が遅いようにも思えるが、万年人手不足なのだと考えると仕方がないことなのかもしれない。次元震などが起きたならば話は別だが、今はまだ迅速に解決すべき案件は起きていないのだから。

ジュエルシードの搜索は一度帰つて着替えてから行う。そのため自宅に帰ろうと歩いていると、校門の方へ向かう高町達の姿が目に入つた。

そう言えば……あちらの世界ではなのはとアリサの仲が悪くなつた時期だつた氣がする。しかし、この世界では……

「なのははちゃん、今日も一緒に帰れないの？」

「うん、ごめんね」

「別に謝らなくていいわよ。大事な用なんですよ？」

「うん、まあ……」

「じゃあ仕方ないわ……でも」

にやくとアリサの口角が上がった。

あの顔はどこぞの小狸が人をからかう時に浮かべる面に非常に似ている。

「事情くらい聞かせて欲しいわよね。いつもいつも夜月と一緒に帰ってるみたいだし。いつの間にか一つのこと名前で呼ぶようになつてるし」

「え……えっと、それはその」

「アリサちゃん、あまりそういうのは言わない方が」

「じゃあすずか、あんたは気にならないわけ？」

「それは……気にならないって言つたら嘘になるけど」

険悪な雰囲気は出ていない。

だが……何を話しているかは聞こえていないが、これまでに培った経験があるから別の意味で嫌な空気を感じる。

出来れば近づきたくない。しかし、奴らは校門付近で立ち止まつてゐる。

下手に警戒して動きを変えれば、それがかえつて怪しまれるわけで……お嬢様方はこういうとき非常に面倒な存在である。他の生徒の近くに居てやり過ごせることを祈ろう。

「というわけでなのは、あんたあいつと何やってるの？ もしかして……逢引きとか？」

「逢引き？」

「なのははちゃん、デートのことだよ」

「まあぶつちやけると、あたしとすずかはあんたがあいつと恭弥さん達みたいにイチャイチャしてるのがつて聞きたいわけ」

「なるほど……え？ ええええええいやいやいやそそそそんなことしてないよ！」

顔を真っ赤にして全力で両手を振るなのは。こんなことを思うのは失礼なのだろうが懐かしさを覚える光景だ。

しかし、あれが10年もすれば絶対零度の笑みに変わるとと思うと……。子供の頃に彼女をからかうのは得策ではないのかかもしれない。今の大きくなってくれた方が可愛げもあるし。

「ショウくんは友達だし！　た、確かに最近は一緒に居ることも多いけど、そそそれはその理由があるからであつて。別になのはとショウくんはお兄ちゃん達みたいなことはしてないといいますか……」

「一人称の変化に丁寧口調……なのはが主に謙遜するときに見られる特徴ね。すずか、あんたどう思う？」

「アリサちゃんって本当なのはちゃんのこと好きだよね」

「なつ……そそそういうこと聞いてんじやないわよ！　あんたはなのは達のことどう思つてんのかつて聞いてんの。そもそも、こんなこと言わなくとも分かってんでしょ！」

今度はアリサの番か。

正直あの3人の中で1番誰がやばいかと聞かれたらすずかだ。

一見内気で大人しいように見えるが、運動神経はそのへんの男子よりも高い。また時折お前は何かの達人かと言いたくなるほど気配に敏感なところがある。加えて小悪魔じみた一面があるだけに……。考えるのはやめよう。

今の俺は小学3年生。小学生の時期は男子よりも女子の方が早熟だ。まあ最近の子供はマセるので今でも嫉妬染みた視線を浴びたりするが……恋愛をするにしてもまだ先のことだ。今はまだやるべきことがあるのだから。

「そして夜月、あんたも何さらつと通り過ぎようとしてんのよ！」

「……ちつ」

「ちよつあんた今舌打ちしたでしょ！　あたしと話すのが嫌なわけ？」

普段のアリサならともかく今のアリサと話すのは普通に嫌だ。

だつて……どう考へても面倒臭い。具体的に言うなら酔っぱらつてクロノへの不満を漏らし、その後フェイトとの関係を聞いてくる工

イミイイくらい面倒臭い。そんな気配がブンブンする。

「まあまあアリサちゃん、夜月くんも別に悪氣があつたわけじゃないだろうし」

「悪気がないのに舌打ちなんかしないでしょ！」

「そんなことより何か用？出来れば早く帰りたいんだけど」

「そういうところは平常運転ね！用がないと話しかけちゃダメなわけ？」

ダメではないですが、そんな睨みながら言われたらダメだと答えたくなります。だつて僕も人間ですから。

「……まあいいわ。こんなことを話したいわけじゃないし。ねえ夜月、あんたなのはと何やつてんのよ？最近ずいぶん仲良くなつたみたいだけど……もしかして」

「君が思つてるようなことはしてないよ。そもそも……高町にそういうのはまだ早いだろ。君や月村とかなら別だろうけど」

「……それもそうね」

「あはは……納得しちゃうんだね。まあ私も納得してるけど」

「そこで納得するなら私が言つた時に信じてくれないかな！」

精一杯の怒気を表現するかのように全身で訴えるなのはだが、からかわれて騒いでいるようにしか見えない。

だが今の俺は、その光景を騒がしいと思うだけでなく可愛らしいとも思えている。

大人の精神で子供を見ているからなのか、それとも……純度の高い作り笑顔で他人を威圧する教導官様と比較しているからか。多分どちらかといえば後者だろうな。

「……じゃあ俺はこれで」

「ああうん。ショウくん、またあとでね」

「そういうこと言うから……」

「え？」

「何でもない。またあとでな」

アリサ達に早めに解放されることを祈つてるよ。

……何か一気に疲れたな。過去のようになくなるよりはマシな

んだろうが、あのテンションに絡まれるのはきつい。家にも騒がしい奴が居るし、そいつの影響で保護者代わりまでおかしな方向に進んでいる氣もするし。

「……けどまあ」

これも目的を果たせたようなものか。

大きな流れからすれば微々たる変化なのかもしれない。だがそれでも俺の知るなのはとは違う展開だ。それがプラスになつてているのならば、俺自身が苦労することは良しとしよう。

「……今夜も頑張りますか」